２０２４年１月ＮＨＫ近畿地方放送番組審議会

１月のＮＨＫ近畿地方放送番組審議会は、２４日(水)、ＮＨＫ大阪放送局（ウェブ・対面開催）において、８人の委員が出席して開かれた。

議事に先立ち、「ＮＨＫ経営計画　2024-2026 年度」の概要についての説明があり、議事に入った。

会議では、事前に視聴してもらった、歴史探偵「光る君へコラボスペシャル」を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、２月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長　　笹岡　隆甫（華道　未生流笹岡　三代家元）
副委員長　　徳永　恭子（（株）神戸新聞社　経営企画局長　件　資産活用室長）
委　　員　　井上　信太郎（(株)善兵衛　代表取締役）
岩朝　しのぶ（特定非営利活動法人　日本こども支援協会　代表理事）
太田　達（立命館大学特別招聘教授・工学博士）
藤本　真一（ＮＰＯ法人阪神淡路大震災１．１７希望の灯り　代表理事）
前川　卓也（大阪大学大学院　情報科学研究科　准教授）
山本　篤　（プロ陸上競技選手）

（主な発言）

＜歴史探偵「光る君へコラボスペシャル」
（１月２日（火）総合 後９：００～９：５９）について＞

○　大河ドラマの主人公である紫式部や藤原道長についてはどのような人物か知らない部分も多く、番組を興味深く拝見した。平安時代の貴族たちの過密な仕事ぶりを知り、優雅に遊んで生活していたイメージが覆った。限られた歴史的資料から情報を引き出し、その裏付けによって大河ドラマが制作されていることをこうした番組を通して伝えることも大切ではないかと感じた。

○　歴史にあまり興味のない人にも大河ドラマ「光る君へ」を見てみたいと思わせるような内容だった。見る前は約１時間の番組を見るのをおっくうに感じたが、

見始めると飽きることなくあっという間に見終わってしまった。平安貴族の恋愛事情をスタジオに寝所のセットを組むことで実証的に再現しており、現代の目線から御簾(みす)の内側と外側からの見え方の違いなどが分かりやすく伝えられていた。

○　大河ドラマの時代背景を細部まで見ることができ、男性司会者の視点や突っ込みのセンスもよく、素晴らしかった。平安時代の貴族の勤務状況が過酷で、仕事が忙しすぎて子どもの死に目にも会えなかったような描き方をしていたが、平安時代と現代とでは死の捉え方が違う背景などを置き去りにした現代的な解釈だと感じた。

○　歴史に詳しくなかったため、いろいろと学ぶことがあり感心しながら見た。ただ、この番組を見て大河ドラマ本編を見ようと思う人がどれぐらいいたのか、本編の視聴につないでいけたのか少し気になった。

○　紫式部や藤原道長の個性を想像して作り上げた筆跡がほれぼれするほど美しく、このドラマをきっかけに書道に興味を持つ人が出てくると思うので、ぜひ書道がテーマの番組も制作してほしい。平安貴族が現代人以上に働いていたことを示す資料が残っていたのも興味深かったが、サンプルが２人分の日記しかなかったので、結論付けるにはもう少し数があった方がよかった。大河ドラマ「光る君へ」本編も見てみたが、幼少期の史料がほとんどなく創作になるのはしかたがないが、紫式部の母親が殺されるシーンを見て、人の生死に関する部分まで創作してよいのだろうかと気になった。

○　歴史に詳しくないが、紫式部や藤原道長のストーリーは興味深かった。主演の吉高由里子さんが、本来左利きなのに右手で書道の特訓をして撮影に臨み、俳優が実際に文字を書く様子をそのまま撮影で利用すること、また本番でいちばん上手に書くという裏話を知り、大河ドラマ本編を見るときはそこに注目することでより深く楽しめると感じた。

○　古文書の読み解きに迫力があり、ワクワクしながら見た。これまであまりなじみのなかった平安時代の歴史が非常にわかりやすく、この時代に親しみが持てた。一方で、大河ドラマ「光る君へ」本編は人物相関が複雑でなかなか頭に入ってこ

ないため、理解の助けになるような演出の工夫があればよいと感じている。

○　歴史的資料でしっかりと検証がなされており、大河ドラマ本編で書道指導をしている裏方の人を取り上げるなど、非常にＮＨＫらしくてよい番組だった。ただ、平安貴族の仕事を紹介するパートで、男性については詳しく紹介されていたが、女性については情報が少なかったので、もう少しバランスを考慮した方がよいと感じた。

○　歴史上の人物の筆跡を想像し、筆跡を演出することでキャラクターを作り上げていく発想自体が、探偵のようで面白かった。大河ドラマでは藤原道長は幼少期あまり字がうまくない設定にしたと説明されていたが、「御堂関白記」を読み解くとどのような性格の人物だったのかをもっと知りたかった。最愛の人を失った紫式部がなぜ、いちずな恋愛物語ではなく恋多き光源氏の物語を作ったのか不思議に思った。国風文化を生み出した平安時代を見ていくことは日本の美しさをひもとくようだと感じる。

○　大河ドラマに出演している俳優をゲストに起用し、貴族社会の生活や文化、男女の接点など、平安時代の歴史が分かりやすく解説されており面白かった。平安時代という心理的に遠い時代の題材を現代に引き寄せ、貴族がどういう働き方をしていたなど、若い視聴者も関心が持てる観点から取り上げていた。視聴者に寄り添って制作された番組だと感じた。

○　歴史的な資料が少ない中でも、「御堂関白記」をデータベース化し、細やかな検証や考察がなされていて納得感があった。紫式部の筆跡を表現するため吉高由里子さんが書道を特訓したエピソードは、次回以降の大河ドラマの見どころにつながっていくと思う。御簾(みす)越しの対話や、思いを歌につづり季節の花を添えて交わし合うコミュニケーション、出世し家を守るための人間ドラマなどには、戦国時代にはない面白さがあり期待が膨らむ。大河ドラマを通じて、文化や歴史、芸術的な美、人の思いに心を寄せることに多くの人々が興味関心を持ってほしいと思った。

（ＮＨＫ側）

平安時代は資料がほとんど残っておらず、取り上げることが非常に難しい時代だが、本物の「御堂関白記」の内容を調査したり、実際に御簾(みす)のセットを使って当時の恋愛事情がどのようなものだったのか見せた

りするなど演出の工夫で番組を構成した。

大河ドラマ制作班と、どういう点を見どころとして取り上げるかについて相談する中で、俳優自身が実際に文字を書く点をポイントとし、番組冒頭で書道指導などドラマ撮影の裏側を見せることで視聴者を引き込むことをねらった。

ＳＮＳでの反応の中には、この番組を見たことで大河ドラマも見てみるという意見が見られたので、それなりに効果はあったと思っている。

なじみのなかった平安時代のイメージが変わり身近に感じられたという意見をいただいたが、まさにそれが番組のねらいで、平安時代に興味のない人や「歴史探偵」ファンの視聴者にも大河ドラマを楽しむ下地を作ることが目的だったのでうれしく思う。

（ＮＨＫ側）

大河ドラマ本編の人物相関が分かりづらいという点については、「歴史探偵」でも適宜、同時代のテーマを扱うなどして、理解を含めてもらう機会を作っていきたい。

＜放送番組一般について＞

○　平日午後の「ＮＨＫニュース」などでＡＩによるアナウンスでニュースを伝えているが、飛躍的に良くなったと思う。以前は聞き取りにくかった音声が改善され、非常に聞きやすくなったと感じる。

○　夜ドラ「作りたい女と食べたい女」を見た。レシピを紹介する料理番組ではなく、料理の背景にある作った人のドラマを見せる手法が面白い。食の重要性を哲学的、美学的に見せるような料理関連の番組がＮＨＫには多いと思う。

○　１２月３１日（日）の「第７４回ＮＨＫ紅白歌合戦」を見た。若い世代に人気のアーティストが今年は何をしてくれるのだろうという期待値が上がってきているように感じる。純烈がＮＨＫプラスを宣伝する演出は思い切りがあってよかった。

○　「第７４回ＮＨＫ紅白歌合戦」を見た。この数年は自分が見たいアーティスト

の時間だけ見てきたが、今回は１０代の娘と一緒にずっと見ていられたので、世代を問わず楽しめる新しさがあったのではないか。Ａｄｏさんが東本願寺から披露したパフォーマンスはエンターテインメントと文化のコラボレーションが素晴らしかった。内容が新鮮だっただけに、紅組白組ともに最後を飾るアーティストが数年連続で同じだった点だけが、閉鎖的な感じがして残念だった。

○　「第７４回ＮＨＫ紅白歌合戦」を見た。コマーシャルがなく番組が途切れないのがＮＨＫのよいところだが、いろいろな企画が入り交じるため没入感を得られず残念だった。また、若い世代はそれぞれのアーティスト独自のパフォーマンスを期待していると思うので、コラボレーションが多すぎるとかえって見にくくニーズと合致していないのではないかと思う。

○　１月１日（月）に発生した能登半島地震では、ＮＨＫのホームページやニュース防災アプリでリアルタイムにテレビ放送が見られることがＳＮＳを通じて拡散されていた。一方、テレビ放送画面にはインターネットに誘導するＱＲコードが表示されておらず、残念だった。

○　能登半島地震の報道は、最初に担当した２人の女性アナウンサーの避難の呼びかけに感動し、ＮＨＫにしかできない報道だと思った。関西でも地震が発生した場合、「2025 大阪・関西万博」の夢洲会場は大丈夫なのかなども検証してほしい。

○　能登半島地震では、いち早く避難を呼びかける報道を開始し、ラジオや衛星放送を活用して情報を伝える役目を果たしていた。避難所や支援物資、断水時のトイレの使い方など生活に直結する情報が詳しく伝えられており分かりやすく、地震関連のニュースと通常番組のバランスもちょうどよいと感じる。ただし、民放やネットニュースに比べると、和倉温泉などの観光地や企業の個別の被災状況についての情報が少ないように感じた。

○　能登半島地震は災害報道が誰に向けたものかについて再検証するよい機会だと思う。津波警報が出ている時間帯、どこまでの範囲に、いつまで放送し、どのタイミングで通常の編成に戻していくのか。被災地以外の視聴者からすると、すべての放送局で災害について報道していて、お正月から気持ちが沈んでしまったと思う。同一の情報を北海道から沖縄まで伝える意味を考える必要があると思う。

○　能登半島地震では発生直後に避難を呼びかけたアナウンサーが話題になり、さまざまな反響があったのではないかと思う。阪神・淡路大震災、東日本大震災、熊本地震などを経て、災害報道がどれだけ進化・深化しているのかを知りたい。今回の報じ方でどのような効果や行動変化を生んだのを検証し、報道機関だけでなく市民も一緒に考えられるような機会を提供してほしい。

○　「能登半島地震」により世の中に自粛の動きもあると聞くが、被災地の復興のためには経済活動を活性化させることも重要である。能登への支援なども含め地震からの復興につながる報道をＮＨＫには期待する。

（ＮＨＫ側）

今回の地震は、震源から離れた地域にも津波警報や注意報が出たため、被害がどれだけの範囲に及ぶかという全体像が、発生直後にはなかなかつかめなかった。大阪局でも、域内の津波警報・注意報が解除されるまでは、近畿地方に向けた地震の報道を継続するという判断をした。

誰に向けての災害報道かという意見があったが、まず一義的には被災地や沿岸部の人々への避難の呼びかけのためである。女性アナウンサーの強い口調での「命を守る呼びかけ」は、非常事態であることを被災地の人々に伝えるための一つの判断だったと思う。また、実際にＮＨＫに寄せられた情報に基づいた取材により孤立した人が救助された事例もあった。“命を守る”ことがＮＨＫの災害報道の主眼であるが、どのような形で何ができるのかを常に検証し、災害の局面に応じて被災地支援や復興のために役割を果たしていきたい。

○　１月２日（火）のゴッドハンド「流転の秘宝を復元せよ」（総合　午後 10:20～11:04）を見た。焼き物の修復師のドキュメンタリーだが、カメラワークがドラマのようで映像に引き込まれた。依頼された品物については一切口外せず、表舞台になかなか姿を現すことのない職人の仕事ぶりを垣間見て、このような素晴らしい腕を持つ職人が日本にいることが誇らしく思えた。

○　１月１９日（金）のかんさい熱視線「私はなぜ走るのか　陸上・田中希実×黒

柳徹子　パリ五輪への道」を見た。記者やディレクターがインタビューするのではなく、田中選手が黒柳さんに相談を持ちかけるような対談のスタイルが素晴らしかった。田中選手が黒柳さんに問いかけながら、自分の考えを整理したり、思いを新たにしたりしていく様子が見て取れて、非常によい手法だと思った。

○　かんさい熱視線「私はなぜ走るのか　陸上・田中希実×黒柳徹子　パリ五輪への道」を見た。自分自身もスポーツに取り組む中で、“なぜやっているのか”ということを考えることがあるが、そのヒントがたくさんあり、多くのアスリートに見てもらいたい番組だった。強い選手でもネガティブになる心情が丁寧に描かれていて、スポーツニュースでは知りえないところまで熱心に取材されていた。今年はパリオリンピック・パラリンピックが開かれるので、こうした番組によりアスリートが注目されるきっかけになったらよいと思う。

５月には神戸で世界パラ陸上競技選手権大会が開催され、世界の強豪選手たちがやってくるので、ＮＨＫでも積極的に報道してもらいたい。

○　１月１９日（金）のかんさい熱視線「私はなぜ走るのか　陸上・田中希実×黒柳徹子　パリ五輪への道」を見た。田中選手の緊張をほぐすために、黒柳徹子さんが田中選手に好きな食べ物を聞くシーンをカットせずに残したところがよいと思った。内向的で学生時代の体験から周囲の目を気にしてしまう田中選手が、レース後に大声で「ありがとうございます」と叫ぶ心境を聞きたいと感じた。黒柳さんのことばは、ひとつひとつがシンプルだが、どれもよいことばだった。

（ＮＨＫ側）

黒柳徹子さんとの対談は、田中希実選手の希望により実現した。黒柳さんが田中選手にアドバイスをするような形になるのではなく、相手の話を聞き出すのが上手な黒柳さんが、田中選手の本音を引き出してくれた。最後に、都道府県対抗全国女子駅伝で田中選手が２区で１９人抜きを達成したシーンまで入れることで、非常に立体的な構成の番組になったと感じる。

○　１月１２日（金）ドキュメント７２時間「琵琶湖畔　あのベンチで」を見た。琵琶湖の波打ち際に置かれたベンチからの夕日は美しく、この景色を見るために多くの人が集まりそれぞれの思いを巡らせていた。この番組を見て「行ってみたい」と思う人が増えるのではないかと思う。

ＮＨＫ大阪放送局
番組審議会事務局

２０２３年１２月ＮＨＫ近畿地方放送番組審議会

１２月のＮＨＫ近畿地方放送番組審議会は、２０日(水)、ＮＨＫ大阪放送局（ウェブ・対面開催）において、９人の委員が出席して開かれた。

議事に先立ち、５月１５日（月）に放送した「ニュースウオッチ９」報道へのＢＰＯ意見について報告があり、議事に入った。

会議では、事前に視聴してもらった、「せーの！で編集してみたら」を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、１月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長　笹岡　隆甫（華道　未生流笹岡　三代家元）
副委員長　徳永　恭子（(株)神戸新聞社　経営企画局長　兼 資産活用室長）
委　　員　安達　えみ（合同会社　榧　代表）
岩朝　しのぶ（特定非営利活動法人　日本こども支援協会　代表理事）
井上　信太郎（(株)善兵衛　代表取締役）
太田　達（立命館大学特別招聘教授・工学博士）
佐藤　祐子（(株）国華荘　びわ湖花街道　代表取締役社長）
藤本　真一（ＮＰＯ法人阪神淡路大震災１．１７希望の灯り　代表理事）
前川　卓也（大阪大学大学院　情報科学研究科　准教授）

（主な発言）

＜「せーの！で編集してみたら」
（１１月２７日（月）総合 後７：５７～８：４２（近畿ブロック）について＞

○　ＮＨＫだからこそできる斬新な切り口の番組だった。編集には個々のセンスが出るため、４人のクリエイターが作った映像作品自体は面白かったが、編集という地味な作業工程を番組として構成することには難しさもあると感じた。ただ、クリエイターや職人の技を見せるような番組は面白いと思うので、これからも制作してほしい。

○　４人のクリエイターそれぞれの考え方や編集手法を見ることができて面白かっ

た。一方で、具体的にどのような編集ツールを使っているかなどの情報が少なく、これから編集をやってみたいという人が参考にできる部分は少なかったように思う。クリエイターとして出演していたテレビディレクター津野充さんの「テレビは焦らなくてよいのではないか」という言葉には共感した。情報が偏らず流れてくることや間や過程を大切にすることなどテレビでないとくみ取ることのできないものがあり、ドキュメンタリーなど、ＮＨＫはクオリティーの高い番組を世の中に提供してほしい。

○　タイトルやホームページを見て、これから動画編集を始めたい人たちに手法をレクチャーするような内容をイメージしたが、実際にはプロのクリエイターたちの仕事を見せるような番組だった。素人に学んでほしかったのか、プロの仕事を見せたかったのか、タイトルと内容の兼ね合いが中途半端で、番組の意図がよく分からなかった。

○　番組を見た大学生にも感想を聞いたが、好評意見が多く見られた。４人のクリエイターの作品いずれにも見どころがあり非常に面白く、実験的かつ冒険的でテレビというメディア産業とクリエイター産業の将来性を感じる番組だった。

○　編集する元の映像は、お笑い芸人のたわいもない日常だったが、４人のクリエイターたちの考え方、アイディア、着眼点が非常に面白く、アニメーションやクイズ形式など多様な作品に作られていく過程はたくみが伝統工芸品を作る様子を見るような気持ちで視聴した。

○　映像編集という個人のスキルを客観的に伝える挑戦的なよい番組だと感じた。映像は、今の世の中において一番身近な表現ツールと言っても過言ではなく、Ｅテレで映像編集を教える番組があってもよいと感じる。この番組では、４人のクリエイターが共通の素材を使って自由なテーマで作品を作っていたが、もう少しテーマやジャンルを統一した方が、かえって映像表現の多様性や繊細さが伝わってきたのではないかと思う。

○　４人のクリエイターたちの作品が全く異なる観点から作られており非常に感心した。一方で、どの作品もエッジが効き過ぎており、一般の視聴者が動画編集について学べる要素は少なかったように思う。番組の中でＮＨＫクリエイティブ・

ライブラリーという映像素材を提供するサービスが紹介されており、今度利用してみたいと感じた。

○　“編集”というのは、今の時代のキーワードだと思いながら視聴した。ある素材の中から情報を取捨選択して、一定のメッセージを忍ばせる過程で、同じ素材でも編集者によって切り取るところも仕立ても全く違ってくる。最後に紹介された現役京大生クリエイターの作品テーマが“誤解”だった点は、ともすればフェイク動画なども想起させ、今の時代に考えさせられる番組だと感じた。

○　短い動画を見るだけならＳＮＳでよいが、テレビはその背景にある物語を伝えるものだという点が非常に興味深く、よさだと感じた。スマホで動画を見る機会が増えているが、家族で一緒にテレビを見て会話が生まれるという、昭和の時代には当たり前だったものを取り戻す時代なのかもしれない。家族やみんなでテレビを見て世代に共通の話題を作るのが、連続テレビ小説や大河ドラマなどＮＨＫの番組の役割ではないかと感じる。そういうキャンペーンをしても面白いのではないかと思う。

○　幅広い世代が楽しむことができるキャスティングで、多様なクリエイターの編集の技や感性を楽しむことができた。動画編集に興味のある人に意味のある気づきを与えるだけでなく、現在ＡＩが可能としている編集という領域で、このように多様な表現ができるということを感じさせられた。物事の捉え方によって、これだけの可能性が拡大するという点が面白かった。

（ＮＨＫ側）

挑戦的という言葉をいただいたとおり、これまでにやったことのないような試みで、非常に悩みながら番組を制作した。映像編集がテーマだったため、番組自体の編集についても力を入れ、クリエイター４人の動画をどの順番で見てもらうかという構成も最後まで熟考を重ねた。番組セットはコンピューターグラフィックスで合成しており、最新の技術により斬新さを持たせつつリーズナブルに仕上げられた。インターネットなどさまざまなメディアが先を行っている潮流の中にあるが、テレビはテレビで焦らなくてもよいというメッセージに力をいただいた。

（ＮＨＫ側）

テレビを見ない人にも触れてもらえるよう、放送後にインターネットで話題になりＮＨＫプラスでも見てもらえるような番組を目指した。放送前のＳＮＳでのＰＲ戦略をもう少し綿密に立てられたらよかったと感じている。

＜放送番組一般について＞

○　最終回を迎えた大河ドラマ「どうする家康」は脚本が面白く、「歴史探偵」など他の番組ともうまく連携し、これまであまり知られていなかった家康像を掘り起こし明らかにした点が素晴らしかった。

ただ、「歴史探偵」を見ていると、１回の放送に盛り込む内容が多すぎると感じる。大勢の専門家が出演して解説しているが、数を減らして内容をひとつひとつもっと丁寧に伝えたほうがよいのではないか。

○　１２月７日（木）のえぇトコ「祈りの山を支える名水の里～奈良　天川村～」を見た。タイトルのとおり、生活や信仰・食に水が大切に使われておりテーマが一貫していたのは見事だった。ただ温泉の入浴シーンで、女性タレントが出てくるような期待をあおりながら、実際は男性タレントが出てくるという演出があり、今どき、お色気シーンを想起させる演出は不要だと感じた。民放の旅番組との差別化を考えると、テーマ性であったり、どこまで地域資源を掘り下げられるかであったりという点がＮＨＫならではのよさだと思うので、丁寧な取材を生かした番組作りに今後も期待する。

○　１２月７日（木）の「What’ｓ　買人（かいんど）？」（午後 7:57～8:42 近畿ブロック）を見た。消防車や信号機など、珍しい物を買った人に迫る番組で、関西人ならではの面白さが描かれていて好感を持った。

一方、１２月１５日（金）のかんさい熱視線「若い世代が離れていく・・・　～観光都市・京都の行方～」は、タイトルに合わせた結論ありきの取材がなされている印象を受けた。京都市からの若い世代の流出をオーバーツーリズムが原因と結論づけるにはエビデンスが足りないと感じた。

また、ＮＨＫプラスをよく利用しているが、ジャンルやプレイリストが増え過ぎていて、目当ての番組が探しにくくなっている。

（ＮＨＫ側）

元々は、オーバーツーリズムにより京都の街が住みづらくなっているというテーマで取材をしていたが、その中で、若い世代の流出の動きが大きいということが分かってきたので、そちらに重点が移っていった。指摘いただいたとおり、タイトルを先に見てから番組を見ると、結論ありきの印象を与えてしまったかもしれない。今回のご意見は今後の番組制作に生かしていきたい。

○　１２月８日（金）かんさい熱視線「あるタカラジェンヌの死　宝塚歌劇団で何が・・・」を見た。現役劇団員も出演していたが、取材を受けた側も制作側も勇気が必要な踏み込んだ内容だった。パワハラの問題をセンセーショナルに取り上げるのではなく、組織や経営の本質的、構造的な問題を伝えており、再生への道を歩む後押しをする番組だったと思う。宝塚にはファンも多く、地域の財産でもあるので、今後も継続して取り上げてほしい。

（ＮＨＫ側）

100 年を超えてファンに夢を与えてきた宝塚に何が起きたのか、限られた時間の中で取材を尽くして放送した。遺族側と劇団側との見解が異なっている中、実態に迫るため、現役劇団員の方々にはぎりぎりまで取材交渉を重ねた。難度の高い取材だったが、いろいろな関係者の声を重層的に盛り込んで報じられたと思う。このニュースについては引き続き重点的に取り上げ報じていきたい。

○　１２月１５日（金）の「激突！合戦将棋　姉川の戦い」（総合　後 10:45～11:14 近畿ブロック）を見た。楽しく見られたが、勝敗が決した後の番組終盤がどうしてもしんみりしてしまうので、後味良くすっきり終わらせられる演出方法があればよいと感じた。また１作目と違い、地元の名産品が出てくるおやつタイムがなかったのは残念だった。

○　「激突！合戦将棋　姉川の戦い」を見た。大津局が精力的にＰＲをしており、当日の「おうみ発６３０」には番組を担当したディレクターが出演して熱く語っていて好感が持てた。戦術に特化した構成やわかりやすさで将棋や歴史が苦手な視聴者でも面白く見ることができると思う。次の大河ドラマ「光る君へ」に出演

する玉置玲央さんをキャスティングしたこともＮＨＫらしい工夫でよかった。

また、大河ドラマ　どうする家康「（４８）神の君へ」（総合　後 8:00～8:57）には思わず涙した。家康が望んだ平和な世の中への思いを、今の時代を生きるわれわれがくみ取って生きているのだろうかということを考えさせられた。次の大河ドラマ「光る君へ」にも期待している。

（ＮＨＫ側）

今回は織田信長のキャラクターを際立たせるため、おやつではなくワインにしてみた。この番組フォーマットは「歴史探偵」などほかの番組でも生かせるのではないかと思っている。

（ＮＨＫ側）

第１弾はもともと、大津局の県域放送番組として始まり、近畿ブロック向けの放送を経て全国放送になった。今回は、最初から近畿ブロック向けに放送し、大みそかには第１弾とあわせて全国向けに放送される。

○　１２月９日（土）の地球ドラマチック「ルーブル美術館　８００年の秘密に迫る」を見た。地球ドラマチックは、野生動物や恐竜などがテーマの番組だと思っていたが、今回はルーブル美術館の建物の歴史が丁寧に解説されており、非常に見応えがあった。日本人建築家が設計したニューヨーク近代美術館などもぜひまた取り上げてほしい。

○　１２月１８日（月）の夏井いつきのよみ旅！「選ｉｎ鳥取　前編」を見た。俳句を作った地域の人々にまずは焦点を当て、話を聞いていく中でその背景にある地域性が見えてくるような番組の作りがとてもよかった。

ＮＨＫ大阪放送局
番組審議会事務局

２０２３年１１月ＮＨＫ近畿地方放送番組審議会

１１月のＮＨＫ近畿地方放送番組審議会は、２２日(水)、ＮＨＫ大阪放送局（ウェブ・対面開催）において、１０人の委員が出席して開かれた。

議事に先立ち、令和５年地上基幹放送局の再免許にあたっての総務大臣の要請の紹介があり、議事に入った。

会議では、事前に視聴してもらった、インタビュー　ここから「マーケター　森岡毅」を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、１２月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長　笹岡　隆甫（華道　未生流笹岡　三代家元）
副委員長　徳永　恭子（(株)神戸新聞社　経営企画局長　兼　資産活用室長）
委　　員　安達　えみ（合同会社　榧　代表）
岩朝　しのぶ（特定非営利活動法人　日本こども支援協会　代表理事）
井上　信太郎（(株)善兵衛　代表取締役）
太田　達（立命館大学特別招聘教授・工学博士）
佐藤　祐子（(株）国華荘　びわ湖花街道　代表取締役社長）
藤本　真一（ＮＰＯ法人阪神淡路大震災１．１７希望の灯り　代表理事）
前川　卓也（大阪大学大学院　情報科学研究科　准教授）
山本　篤　（プロ陸上競技選手）

（主な発言）

＜インタビュー　ここから「マーケター森岡毅」
（１１月３日（金）総合　前７：３０～７：５３）について＞

○　人生のバイブルにしたくなるような、大変充実した内容で心に響いた。テレビ番組を流し見することが多い中で、今回は聞き逃したことを巻き戻して見直すくらい、ひと言ひと言が大変印象的だった。ＮＨＫ・民放ともに番組のテロップが過剰になる中で、シンプルなテロップと本当に大切なことばだけを赤文字にしていたことは、かえって効果的でよかった。

○　森岡さんのことは知っていたが、著書は読んだことなく、どういう人物なのかは気になっていたのでよい機会となった。短い時間の中に濃い内容が詰まっていた。自分の強みがないと思っている人にも必ず何かしらの強みがあって、それを信じてチャレンジしてみようというメッセージが若い世代の人たちにも響くと思うので、大学生などにぜひ見てもらいたい。

○　森岡さんのことばがすばらしいと感じた。「権利は平等で、チャンスも平等であるべきだと思う」ということばは、昨今の多様性を重んじる社会に通ずることであり、生きづらさを感じている子どもたちも取り残さないというメッセージを感じた。

○　自分が教べんをとる大学で、350 人ほどの学生にこの番組の感想を聞いたところ、7割の学生は高評価だった。また、森岡さんの著書を持っている学生もいた。一方で、森岡さんをテーマにした番組は過去に民放が制作しており、その番組の冒頭も今回と同じ洋菓子店のシーンから始まっていたことが気になった。

○　年末に近づいているからかもしれないが、人の思いを伝えるような番組が多いと感じている。映像や音声で人々の思いを伝えることがテレビの役割だと考えているが、この番組からは特に大きくそれを感じた。今回のような番組を、生き方に迷っている人に向けてもっと積極的に放送してもよいのではないかと思った。

○　　森岡さんは有名な人であり、この番組は著名人の宣伝のように感じられ、ＮＨＫらしくないと思った。ＮＨＫには、市井で頑張っている人たちに焦点を当ててあげてほしいと思う。また森岡さんの出身大学が神戸大学だからということだとは思うが、神戸をロケ地に選んだことには違和感を覚えた。

○　森岡さんはさまざまなことを成し遂げている人であり、ことばにも非常に説得力があり、すんなりと頭に入ってきた。祝日の朝の７時３０分に放送している番組ということだが、ぜひ若い世代の人々に見てもらいたいと思う。

○　インタビューというのは、さまざまな分野の人に焦点を当てることで、多くの人に響くと思う。いろいろな人がいて、多様な考え方があるということを知ることができるこういう番組はすごく大切だと思った。

○　功なり名を遂げた方へのインタビューというものは難しく、どうしても本人のすごさや優秀さをなぞることになりがちだが、聞き手のアナウンサーがうまく個性や本音など、率直な部分を聞き出しており、非常におもしろかった。時間の関係で難しかったかもしれないが、自分の特徴を見つけてそれを強みに育てていくことが大切だと話していたので、育てていくプロセスが知りたかった。

○　森岡さんは有名人とは言え、知らない人ももちろんいると思うので、番組として放送する意味はあったと思う。具体的なエピソードや、自分の中の気づきになるようなことば、また心に残ることばが番組の中にちりばめられており、誰でも可能性があると思えるような構成になっていたと感じた。ＮＨＫプラスで見逃し視聴はできるかと思うが、放送が祝日の午前７時３０分であり、多くの人に見てもらうには少し難しい時間帯だったのはもったいなく感じた。

（ＮＨＫ側）

　この番組はアナウンサーが企画・制作をしている番組で、途中番組名を変えながら長年続けている。今回は神戸放送局の若いアナウンサーが企画しディレクターの役割を務め、聞き手は経験を積んだアナウンサーが担当した。このように、若手が先輩のインタビュー手法について学ぶ機会にもなっている番組である。

＜放送番組一般について＞

○　１０月１４日（土）の探検ファクトリー「料理の強い味方　海外でも注目！ 日々進化する南部鉄器工場」を見た。南部鉄器は民芸品で斜陽産業だと思っていたが、定番の黒い鉄器だけではなく、カラフルな鉄のティーポットやフライパン、キャンプ用品も作っていることを知り、これまでの知識を改めるよい機会になった。

○　１０月２０日（金）のかんさい熱視線「大阪マルビル物語 1976～2023」を見た。時代を感じさせてくれて、懐かしむことができたが、建物のこれからがどうなっていくのか、その未来像の描き方が十分ではないと感じた。

（ＮＨＫ側）

今回は、マルビルに思いを寄せる人たちの人間ドラマを中心に描いた。ご指摘いただいたことを踏まえ、追加取材を行い「Ｄｅａｒにっぽん」という番組で全国放送する予定である。

○　１１月３日（金）のきょうの料理「６５年続けたらギネス世界記録に認定されましたＳＰ」(総合　前11:20～11:54)を見た。その時々の時代背景を反映した番組構成、歴代の講師の名調子な解説、制作スタッフの思いや頑張りなど舞台裏がわかり大変楽しかった。普段は流し見してしまうような短い番組だと思うが、その裏にこんなにドラマがあったとは知らず感動した。

○　１１月１０日（金）かんさい熱視線「あなたの健康は大丈夫? 続出!?“コロナ・フレイル”」を見た。新型コロナウイルスにより、外出をしなくなった高齢の方々の足腰が弱り健康に影響を及ぼしているという内容だったが、やはり運動することで、食事がたくさん食べられるようになったり、社会参加が増え精神的にもよい影響をあたえたりすることは、実際によくあることなのでぜひ全国放送をして多くの人に知ってもらいたいと思った。

（ＮＨＫ側）

コロナ・フレイルはクローズアップ現代でも取り上げたが、今回は影響だけでなく、その対策や実践も含めて取り上げた。ＮＨＫニュースＷＥＢでも新型コロナウイルスやコロナ・フレイルへの対策についても紹介している。

○　１１月１３日（月）の市民Ｘ『謎の天才「サトシ・ナカモト」』(総合　後22:0～22:44)を見た。ビットコインの生みの親と言われながら表に出てこないサトシ・ナカモトという人物について、各分野の専門家が様々な角度から語るインタビューで、その正体に迫る番組であった。大変ＮＨＫらしく面白い番組だと感じた。

（ＮＨＫ側）

この番組は、若いディレクターも含め制作陣が新しい演出に挑戦している番組であり、私も期待している。いただいたご意見は制作現場にも伝えたい。

○　１１月１６日（木）、１７日（金）の「Ｌｉｖｅ　Ｌｏｖｅ　ひょうご」を見た。

ＮＨＫ神戸放送局と兵庫県の民放が連携して双方のアナウンサーがそれぞれ相手の局の番組に出演していたが、ＮＨＫの真面目な印象のアナウンサーのおちゃめな部分など、素の表情が見られて大変楽しかった。次に機会があれば、それぞれの放送局らしさがはっきりと出る企画になればよりおもしろくなると思う。

（ＮＨＫ側）

今回はある種のトライアルとして始めたことで、神戸放送局の局長からも非常に学びの多い２日間だったと聞いている。改善を重ねながらできる範囲も広げていきたいと考えている。

○　１１月１７日（金）のかんさい熱視線「奈良を“音楽の都”へ　ピアニスト・反田恭平」を見た。反田さんの奈良を音楽の都にしたいというのは、なかなかすごい挑戦だなと思った。雨音が混ざりながら演奏されたショパンは、すごく感動的だった。私自身奈良が大好きで移住してきたので、反田さんが奈良を選んでくれて、奈良から世界に羽ばたく人材を育てたいと言っていたことに、ものすごく感動した。

（ＮＨＫ側）

今回は、音楽番組を制作しているグループのディレクターが、以前から縁があって取材をしている反田さんの活動を追ってみたらどうかということで企画した。コンサートは本格的に収録して別番組として全国放送する予定だ。さまざまな専門性を持つディレクターたちがタイムリーなテーマで番組制作できる体制を整えており、こうしたドキュメンタリー番組の制作には今後も取り組んでいきたい。

○　１１月２１日（火）の北朝鮮の偵察衛星打ち上げに関するＪアラートを伝えた緊急ニュースについて、ＮＨＫだけでなく民放も放送していた。ＮＨＫは手話でも情報を伝えていることに加えて、知りたい情報がテロップでずっと出ていたのはよかった。一方で、民放の方がすぐに中継が入り、事態の緊迫感のようなものは民放の方が伝わってきたと感じた。

○　ＮＨＫは５つぐらいの弾道ミサイルについての情報に、２次元コードや手話などが重なり、画面がとても見づらかった。

（ＮＨＫ側）

Ｊアラート発表時は全放送波で臨時ニュースを伝えることにしており、本部以外の地域放送局では対応ができない。さまざまな情報を次から次へと画面に表示することは、今後整理していく必要があると考えている。中継のタイミングについても、検討しなければならないと考えている。

（ＮＨＫ側）

Ｊアラートの伝え方についてはどう改善していくかすでに検討を始めており、みなさまからいただいたご意見は現場にきちんと伝えて参考にしていきたい。画面の構成については、命を守るということで言えば視認性を高くして、何が起きているのかを知ってもらい避難行動につなげてもらう必要がある。情報が多いがために、かえって分かりにくいというご意見は参考にさせていただく。

ＮＨＫ大阪放送局
番組審議会事務局

２０２３年１０月ＮＨＫ近畿地方放送番組審議会

１０月のＮＨＫ近畿地方放送番組審議会は、１８日(水)、ＮＨＫ大阪放送局（ウェブ・対面開催）において、９人の委員が出席して開かれた。
会議では、事前に視聴してもらった、連続テレビ小説「ブギウギ」第１週を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、１１月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長　笹岡　隆甫（華道　未生流笹岡　三代家元）
副委員長　徳永　恭子（(株)神戸新聞社　経営企画局長 兼 資産活用室長）
委　　員　安達　えみ（合同会社　榧　代表）
岩朝　しのぶ（特定非営利活動法人　日本こども支援協会　代表理事）
井上　信太郎（(株)善兵衛　代表取締役）
佐藤　祐子（(株）国華荘　びわ湖花街道　代表取締役社長）
藤本　真一（ＮＰＯ法人阪神淡路大震災１．１７希望の灯り　代表理事）
前川　卓也（大阪大学大学院　情報科学研究科　准教授）
山本　篤　（プロ陸上競技選手）

（主な発言）

＜新連続テレビ小説「ブギウギ」第１週
（１０月２日（月）～６日（金）総合 前８：００～８：１５）について＞

○　アニメーションと人形劇が混ざり合ったオープニング映像は芸術性が高くて素晴らしかった。人形が怖いという意見もあるようだが、エンターテインメントがテーマの連続テレビ小説にふさわしいと感じる。銭湯のセットは、外観も内装も精巧に作られていて感銘を受けた一方、路地の地面のセットは作り物感がありもったいないと感じた。主人公の鈴子が、下町に生きる魅力ある大人たちに囲まれ育っていく様子が楽しみである。

○　家族間の会話でのツッコミのシーンは大阪の文化を感じさせて非常に面白い。現代の感覚で聞くと大阪弁がきついような印象を受けるが、大正から昭和にかけ

ての大阪弁はこのような感じだったのかなと思いながら聞いている。オープニング映像は斬新で、少々怖い印象も受けたが、今後のドラマのストーリーを暗示しているようで面白いと感じた。また、人形の表情をどのように出しているのか気になった。

○　主人公鈴子が愛らしく、第１話は特に爽快感があり、エネルギーにあふれていて素晴らしかった。一点残念だったのは、鈴子の実家の銭湯「はな湯」の煙突のシーンがコンピューターグラフィックスで合成されているのか、作り物のような感じがしたことである。一瞬のことではあるが、それまでの映像と質が違い現実に引き戻されてしまった。

○　前期の連続テレビ小説「らんまん」が終わってしまうのを残念に思っていたが、その気持ちをよい意味で打ち破ってくれた。モデルとなった笠置シヅ子さんのことは知らなかったが、明るいムードで朝が楽しくなるドラマである。それぞれの俳優もみなはまり役だと思う。人の清らかさや正しさのようなものを映像として見ることで、それが毎日毎日私たちの心の中に余韻として残っていくのが連続テレビ小説の魅力だと思う。主題歌「ハッピー☆ブギ」はインパクトがあり、人形劇も昔ＮＨＫで放送していた「プリンプリン物語」を思い出し懐かしかった。

○　主題歌をドラマの出演者が歌うのはこれまでにない面白い取り組みだと感じた。第１週から２週にかけて主人公を子役が演じていたが、視聴者の心をつかむために重要な放送開始直後という時期を子役に任せていることに感心する。デジタル放送になってから、舞台セットや映像表現のクオリティーが年々上がっており時代背景を忠実に再現していると感じるので、これからもこの品質を継続していってほしい。子役が入浴するシーンもあったが、視聴者から批判があった場合はどのように対応していくのか。

○　登場人物が魅力的で、銭湯に集う脇役の人々にも個性があり温かみのあるドラマだと感じる。主人公の一人称「わて」は現在の大阪では耳にしないが、古い大阪弁で温かみがさらに増していると感じた。ただ「アホのおっちゃん」という呼称は、今の時代に放送してよいものか気になった。ドラマで描かれる梅丸少女歌劇団の男役トップスター役を、モデルとなったＯＳＫ日本歌劇団の現役男役スターである翼和希さんが演じることで、舞台に迫力と説得力が生まれ非常によいと

感じた。

○　陽気に朝を迎えられる楽しい番組である。ただ、少々大阪弁が誇張され過ぎている気がした。鈴子と弟が歩いている場面の映像がいかにもスタジオのなかで撮影した印象で、たとえ一瞬であっても細かい部分にこだわった方がよいと感じた。

○　明るいストーリーの中に、鈴子の出生の秘密や、歌劇団の中での競争などがうまく混じり合っており、明暗のコントラストがよいと感じる。大阪局が制作する連続テレビ小説では、関西出身でない俳優のイントネーションが話題になることが多いが、鈴子の父親役の柳葉敏郎さんは言葉の間やテンポが絶妙で、大阪弁のよさが表現されていると感じる。変に大阪弁を誇張したり、お笑い芸人にギャグを言わせたりするのではなく、きちんと間やテンポで大阪の雰囲気を出しているのが好印象だった。

○　「芸者の子」などの表現は少し気になったが、大阪らしいシャキシャキした明るさと人情味があって、元気が出るドラマだと感じた。子役の澤井梨丘さんの演技や歌唱がすばらしく、主演の趣里さんに似ていてよいキャスティングだと感じた。

○　ドラマの中で歌われる挿入歌が非常によかった。ボッカチオの「恋はやさし野辺の花よ」は誰しも聞いたことのある曲で、重要なシーンで何度も使うことで視聴者の心をつかんでいると感じる。「ふるさと」のように、次世代に受け継ぎたい日本の曲が歌われているのもよいと感じた。日本舞踊を習うシーンで使われていた「梅は咲いたか桜はまだかいな」の歌い出しで始まる小唄も、多くの視聴者に花街や日本舞踊のイメージを伝えるのに最適な選曲だと感じた。今後も、誰もが口ずさめるような曲が登場するのが楽しみである。

（ＮＨＫ側）

キャストは、芝居だけでなく、歌唱や踊りを加味して配役した。歌劇団での修業時代を描くにあたり、モデルとなるＯＳＫ日本歌劇団を丁寧に取材し、歌劇の世界に生きている人たちに今も引き継がれる空気感を台本に反映させることにこだわった。

オープニング映像は、歌と踊りのショーというコンセプトであのような

演出になった。人形は手作業で動かしており、顔の表情は実際に人の表情から作成したコンピューターグラフィックスを貼り付けることで人間らしさを出している。

美術セットや映像についての意見を多くいただいたが、ハイビジョンになるほどセットのクオリティーを高めていかないと映像化に耐えられないという難しさがある。デジタル技術の進歩により短期間で映像加工ができたり、カメラのレンズも高性能化したりしているので、うまく工夫して映像の質を高めていきたい。

ドラマで使われる大阪弁については、笠置シヅ子さんの自伝が「わて」という一人称で書かれており、現代の人が聞くと違和感を覚えるかもしれないが、人情味のある人柄を表現できているのではないかと考える。入浴シーンについては、実家が銭湯の設定なのでストーリー上必然性もあり、出演者本人および保護者に丁寧に意向を確認し、カメラの位置や映像の加工などさまざまな配慮を行った上で制作している。

＜放送番組一般について＞

○　１０月９日の「レンタルＮＨＫ～あなたの街を、ずっと見ている～」（総合　午後4:40～5:30）を見た。ブラジル人などの外国人が多く暮らす愛知県豊田市の「保見団地」に現在暮らしている人たちが、２０年近く前にＮＨＫが制作したドキュメンタリー番組を視聴し、これからの街作りに生かしていくという内容だった。同じ地域の異なる時期の様子を見るというのはこれまでになかった手法で、観点が秀逸だと感じた。

（ＮＨＫ側）

この番組は名古屋放送局が制作し全国向けに放送したものである。ＮＨＫが撮影してきた、地域やそこに暮らす人々の記録は、ＮＨＫだけでなくその土地の財産でもある。アーカイブス映像には権利上の問題や放送倫理上の観点などから放送に結びつけるのが難しいものも多いが、今後も引き続き視聴者に還元していく方法を検討していきたい。

○　連続テレビ小説「らんまん」が終わってしまったが、１０５話の「菊比べ」のシーンは秀逸だった。野路菊という原種の菊や品種改良された華やかな菊などさ

まざまな種類が並んでいたが、菊は古くから日本人に親しまれており、日本人がずっと花を愛してきたことが象徴的に描かれていると感じた。主人公万太郎の「みんなに花を愛でる思いがあれば、人の世に争いは起こらんき」というセリフを聞いて共感した。

１０月１２日（木）の「Ｒｅ－Ｎコン　青春 2020-22　～もう一度あの合唱を～」はコロナ下の学生たちが抱えてきた合唱への思いが紹介されていて心を打つ番組だった。

○　１０月１３日（金）の「ニュースきん５時」を見た。視聴したきっかけは「ブギウギ」橘アオイ役の翼和希さんが出演されていたことだったが、ＩＰＰＯＵというコーナーの中で、全国の山林のおよそ半分で境界線が定められておらず売買や相続の問題が発生していることなどが伝えられており、大変勉強になった。

また、１０月１４日（土）の「サンドどっちマンツアーズ“朝ドラ・ブギウギSP”（再）」では「ブギウギ」出演者２人がそれぞれ自分の地元を紹介しており、役柄とは違った素顔が見えて好感が持てた。

○　１０月１４日（土）の「ちゃうんちゃう？」を見た。赤ちゃんの土俵入りに興味を持って視聴したが、それ以外にも関西のさまざまな地域の情報が紹介されており面白かった。ＮＨＫらしくない番組ではあるが、バラエティーの演出で地域の特徴を知ってもらうのはよいと感じた。

（ＮＨＫ側）

「Ｒｅ－Ｎコン 青春 2020-22～もう一度あの合唱を～」は、新型コロナウイルスの影響で中止や制限下での開催となった 2020 年から 22 年のＮＨＫ全国学校音楽コンクール（Ｎコン）の歌をみんなであらためて歌おうというイベントを番組化したものである。歌っている子どもたちの表情が生き生きと描かれることを工夫して制作した

「ニュースきん５時」の山林問題についてのリポートは、普段「歴史探偵」を担当しているディレクターが「歴史探偵」の取材で山林を訪れた際に得た情報をもとに制作した。「ニュースきん５時」は大阪局のさまざまな専門性を持つディレクターが携わっており、そのことが強みだと考えている。またこの番組では「ブギウギ」出演者など魅力的なゲストに出演してもらうことで、普段ニュースを見ない人たちにも見てもらえるような工夫が大切

だと考えている。「ちゃうんちゃう？」は月１回の放送で視聴習慣がつきにくいが、関西のさまざまな地域の魅力や意外な情報をクイズ形式で楽しく見てもらうことをコンセプトに内容をブラッシュアップしている。

○　１０月６日（金）ねほりんぱほりん「今年もやるよ～！ねほりんぱほりん」を見た。顔出しＮＧのゲストがブタの人形にふんして赤裸々に語る内容で、非常に面白かった。人形の動きも大変リアルで、人形操演だけに焦点を当てた番組も見てみたいと感じた。

○　１０月１４日（土）のＥＴＶ特集「“同じで違う”傷を、共に生きて～震災から１２年　夫婦の日々～」を見た。東日本大震災についての番組をなぜこのタイミングで放送しているのか不思議に思ったが、息子２人を亡くした夫婦がすれ違いながらも、少しずつ分かち合っていくようになる様子がきちんと撮影されていて素晴らしかった。このようなテーマのドキュメンタリーには、ジャンルの垣根を越えてさまざまなディレクターが携われるような体制を作ってほしい。阪神・淡路大震災についての報道も、短期間で撮影するのではなく、記者たちが長期間腰を据えじっくり取材できるような体制を整えてほしい。

（ＮＨＫ側）

この番組は、仙台局が制作した地域放送番組をＥＴＶ特集として再編集し全国放送したものである。ＮＨＫでは先日発表した 2024～26 年度の中期経営計画（案）の中でも、地域情報による多様性・多元性の実現を掲げており、指摘いただいたように、地域に根ざした取材を行い、地域ならではの情報を発信していくことがＮＨＫの強みだと考えている。厳しい財政状況にあっても、各放送局が地域の特性に応じたサービスを提供するとともに、全国ネットワークを生かしたコンテンツ展開を進めていく。

○　１０月１６日（月）のネコメンタリー　猫も、杓子（しゃくし）も。選「長岡弘樹とふくとまり」を見た。一般人がなかなか垣間見ることができない小説家の仕事現場にカメラを入れることだけでも貴重だが、それを猫の視点からのぞくという演出が非常に面白く、ＮＨＫならではのドキュメンタリーだと感じた。

ＮＨＫ大阪放送局
番組審議会事務局

２０２３年９月ＮＨＫ近畿地方放送番組審議会

９月のＮＨＫ近畿地方放送番組審議会は、２０日(水)、ＮＨＫ大阪放送局（ウェブ・対面開催）において、９人の委員が出席して開かれた。
会議では、事前に視聴してもらった、「カンサイ・コント・ナイト」を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、１０月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長　笹岡　隆甫（華道　未生流笹岡　三代家元）
委　　員　安達　えみ（合同会社　榧　代表）
岩朝　しのぶ（特定非営利活動法人　日本こども支援協会　代表理事）
井上　信太郎（(株)善兵衛　代表取締役）
太田　達（立命館大学特別招聘教授・工学博士）
佐藤　祐子（(株）国華荘　びわ湖花街道　代表取締役社長）
藤本　真一（ＮＰＯ法人阪神淡路大震災１．１７希望の灯り　代表理事）
前川　卓也（大阪大学大学院　情報科学研究科　准教授）
山本　篤　（プロ陸上競技選手）

（主な発言）

＜「カンサイ・コント・ナイト」
（８月２８日（月）総合 後７：５７～８：４２（近畿ブロック）について＞

○　それぞれのコントに十分な時間がとってあり見応えがあった。カメラの数が多く、さまざまな角度のカットが切り替わったことで飽きずに見られたと感じる。最近のお笑い事情に疎いので、出演したお笑い芸人の経歴をもう少し丁寧に紹介してもらえたらありがたかった。司会やゲストに俳優をキャスティングしたのは華があってよいと思った。コントの裏話などをもっと聞けたらさらによかったと思う。

○　４５分があっという間に感じるぐらい楽しく視聴した。ベテランばかりではなく若手の芸人がたくさん出演していたのがよかった。次回は生放送に挑戦してみ

るなど、攻めたチャレンジをしてみてもよいと思う。ＮＨＫのコント番組と言えば「ＬＩＦＥ！」が代表的で、ＮＨＫという硬派なイメージを逆手に取ったシュールなお笑いが展開されていて面白い。ＮＨＫが娯楽番組を制作することについては賛否両論あると思うが、面白い番組を作って関西から全国に発信してくれることを期待する。

○　学校ではやっているカードゲームのコントなどもあって、子どもも楽しく見られる内容だった。連続テレビ小説「ブギウギ」に出演する伊原六花さんがコントの中でダンスを披露し、芸術性が盛り込まれていたのもよかった。ただ、肌を露出して笑いを取るようなコントには違和感を覚えた。昨今、児童虐待の中でも性的虐待が非常に増えている。さまざまな幼少期を経た人たちがいる中で、裸の芸で笑いを取るというのは許容できず、今回のコントはギリギリだと感じた。

○　コントとは何かということを考えながら見た。上方において、コントと漫才の境目がどこにあるのか、何をもってコントとして扱うのかなどについて解説があればより面白かったと思う。また、背景に映る舞台装置が気になってしまった。もっとシンプルな方が見やすいと感じた。

○　司会がかまいたちの山内健司さんと俳優の藤原紀香さんで期待して見たが、コントとコントの間のスタジオトークに違和感があり、２人を生かし切れていないという印象だった。コントや漫才などお笑いのジャンルは文化としても確立しており、いろいろな物の見方を提供するという点で意義があると感じる。コントを披露したお笑い芸人の方々が若手中心で、チャレンジの場となっていたのがよかったと思う。今後は大阪・関西万博もあるので、関西でこのような番組を盛り上げていくことは大切だと感じる。

○　コント番組は、出演者のネタが番組の出来を左右する点で、ＮＨＫが制作しても民放が制作してもそれほど大きく差異は出ないと思うが、キャスティングにはＮＨＫらしさが出ていたと感じる。また、ＮＨＫの作る番組は、スタジオの演出であったり照明であったり、出演者であったり、一目でＮＨＫと分かる番組が多いと思う。ＮＨＫの娯楽番組を不要だとは思わないが、やはり受信料で成り立つＮＨＫに視聴者が求めるものは、普段スポットを浴びないような人々や地域を取り上げる番組だと思うので、“ＮＨＫらしくない番組”と言われてしまうのではな

いか。

○　楽しく視聴できる番組だった。なぜ今このような番組を平日の夜に単発で放送するのか疑問に思ったが、「ＮＨＫ上方漫才コンテスト」の歴代の受賞者を招いて関西のお笑いを盛り上げようという意図だと解釈した。そういう意味では、「ＮＨＫ上方漫才コンテスト」は他のお笑いショーレースに比べて全国的に注目されることが少ないため、受賞者に活躍の場を提供するというのは関西のお笑いの文化を盛り上げるために非常に大事で、こういう機会がもっと多くあってもよいと思う。

○　あまりよく知らないお笑い芸人が出演していたが楽しく笑いながら見られる番組だった。関西にはお笑いの文化が根付いているので、関西で活躍している芸人を取り上げる番組を積極的に制作するとよいと思う。特番だけでなく定時番組の中でもこのようなキャスティングがあるとよい。また、連続テレビ小説「ブギウギ」に出演する俳優がコントに参加する試みも新鮮で面白いと感じた。

○　関西の演芸界においてコントは印象が薄いので、関西のコント番組をつくったのはチャレンジだと感じる。しかし、関西ならではのネタが少なく、司会に藤原紀香さんを起用した以外に特別な関西色は感じられなかった。若い世代の間でコント人気は高いので、この時間帯にゆったり見る番組としてはよいと感じた。コントは漫才に比べて観客の好みや笑いのツボが顕著に出るため難しさもあるが、磨かれたコントをまた見たい。

○　お笑い番組はネタによって面白さが左右される。今回も少し冗長に感じるような点もあったが、全体的には非常に楽しく見ることができた。ＮＨＫの娯楽番組のよさは、以前大阪局が制作していた「バラエティー生活笑百科」のように、笑いに加え、少し知的なところがある点だと思う。また、親子や、祖父母と三世代で見るようなこともあると思うので、ある程度の品の良さが必要だと思う。連続テレビ小説に出演する俳優がコントに参加するのは、ＮＨＫらしくてよいと感じた。

（ＮＨＫ側）

コントはどちらかというと関東で人気があり、これまで関西ではあまりメジャーではなかったが、最近、若手のコント師たちの活躍が顕著に

なっている。そういうお笑い界の流れを感じ取ってもらうねらいで制作した番組であり、コンテスト優勝経験を持つような実力のあるお笑い芸人に出演してもらった。司会の藤原紀香さんは関西への愛情やお笑いへの理解が深く、意外性をねらってキャスティングした。ＮＨＫらしいお笑いとは何かというのは常に考え続けている難しいテーマだが、“面白い番組を作ってほしい”というエールもいただいたので、引き続き尽力していきたい。

（ＮＨＫ側）

お笑い芸人のネタを尊重しながらも事前打合せなどさまざまな段階でリスクチェックを行い放送倫理上の配慮に努める体制をとっている。

関西出身のコントを得意とするお笑い芸人たちが全国的に活躍して注目を集めているという現在のブームについて、番組の導入部分でもう少し説明できるとこの番組を放送する意図が伝わったのではないかと感じる。第２弾、３弾がある場合には、改善していきたい。

＜放送番組一般について＞

○　７月２０日（木）のえぇトコ「幸せ吹き出す名水タウン～大阪 吹田市～」を見た。１０年ほど吹田市に住んでいるが、初めて知る情報がたくさんあり勉強になった。吹田がこのような紀行番組で取り上げられることはあまりないので市民としてとてもうれしかった反面、吹田市民以外はそもそも見ようと思うのかが気になった。特定の地域を番組で取り上げた際、どの市町村の人が興味を持って見たかについて分析すると、番組編成や宣伝に有効な知見が見いだせるのではないかと思う。

○　９月７日（木）のえぇトコ「４００の誇り わが町の城と生きる～兵庫 姫路市～」を見た。何度も行ったことのあるなじみ深い町にも関わらず、知らないことがたくさんあった。姫路城を空撮した映像は、現地に足を運んだとしても見られない視点から町を見ることができて感動した。姫路の人々にしっかりスポットがあたり、城を誇りに思っている様子が伝わってきた。情報量、テンポ、ナレーションなど、全体的にバランスがよい番組だと感じた。ただ、名産品として町の和菓子が紹介されたが、店名や商品名が伏せられていたため、その和菓子の名前に込められた意味や由来などが伝わりにくくなっていて、もったいないと感じた。

○　９月８日（金）の【ＮＨＫ地域局発】えぇトコ「行こうか！悠久の手業の里へ～滋賀 甲賀市～」を見た。手仕事の籠作りや、名産品のかんぴょう作りなどが紹介されており、若い人たちが知らない地域の魅力を再発見するよい機会になると感じた。ぜひ若い世代に訴求力のある出演者を起用して、若い人たちが見ても楽しめる番組作りを進めてもらいたいと感じた。

（ＮＨＫ側）

「えぇトコ」は放送開始から１０年以上がたっているが、変わらず好評いただいており非常にありがたい。どうしても、自然豊かな地域を訪れることが多くなってしまうが、最近では都市部も積極的に取り上げるようにしている。さまざまな地域を幅広く取り上げ魅力を伝えていきたい。

○　８月２１日（月）の「コンテナ全部開けちゃいました！～神戸港編～」を見た。インドからのカレーパウダーやイギリスからのアンティーク家具など神戸らしい積み荷のほか、コンテナを船に運ぶガントリークレーンなど見慣れた風景だが詳しくは知らないものも紹介されており、町の歴史や文化がくっきりと浮かび上がっていた。自分自身と直接関係はないのになぜか誇らしい、シビックプライドを醸成する効果もありそうで、地元の子どもたちや若い世代にもぜひ見てほしい番組だった。

○　９月２日（土）と３日（日）のＮＨＫスペシャル「映像記録 関東大震災 帝都壊滅の三日間」を見た。大阪局は防災に力を入れているので、救える命を本当に救えるような番組作りに励んでもらいたい。

○　９月３日（日）のＮＨＫスペシャル「映像記録 関東大震災 帝都壊滅の三日間後編」を見た。８Ｋ高精細・カラー化された地震直後の映像は衝撃的で、これまで現実味を感じられなかった 100 年前の出来事が自分事のように感じられた。関西では南海トラフの懸念があるので、歴史から学ぶことは多いと感じた。ＮＨＫだからこそ放送できた内容やクオリティーだと思う。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫスペシャル「映像記録 関東大震災 帝都壊滅の三日間」については、関東大震災 100 年の節目に改めて防災意識を高めてもらいたいということで制作した。当時の白黒映像を高精細の映像とすることで、視聴者に自分事

として捉えてもらうねらいがあったので、まさにそのような意見をいただき、番組の目的を果たせたのではないかと思う。大阪局では定期的に、ＮＨＫ全体の災害報道について本部との間で検討する会議を開催している。今後も引き続き防災報道に取り組んでいきたい。

○　９月１９日（火）のドラマ１０「満点のゴール」前編を見た。京都府伊根町を舞台にしていたドラマだったが、地方の課題などではなく、地方そのものを描いていて好感を持った。それに続いて放送された夜ドラ「わたしの一番最悪なともだち」も期待している。ドラマの制作は大変だと思うが応援している。

○　ジャニーズの問題について、９月７日（木）の事務所の記者会見の後、インターネットやＳＮＳの記事ではよく目にするが、テレビのニュースではあまり見かけない気がする。しっかり取材して正面から取り上げてほしい。

○　ジャニーズ問題に関しては、性加害は許されるものではないという総論と、所属タレントの番組出演や扱いをどうするかという各論において、各メディアでかい離が激しい。会見後にＮＨＫが出したコメントを読んだが、民放と違いスポンサーの意向に左右されないＮＨＫだからこそ、今後の対応のスタンスをもっと明らかにしてほしい。

○　　ある民間の企業では、ジャニーズの問題を受けて、タレントの起用状況など社内を総点検したという話も聞く。ＮＨＫでは、現在起用している所属タレントをすべて外す必要があると考えているのか、今後のスタンスについて伺いたい。

（ＮＨＫ側）

ジャニーズの問題については９月７日（木）にジャニーズ事務所が行った会見をＮＨＫでも特設ニュースで伝え、その後１１日（月）にはクローズアップ現代「“ジャニーズ性加害”とメディア被害にどう向き合うのか」で特集した。なぜＮＨＫも含め、テレビ業界は長年、ジャニーズの性加害問題に向き合ってこなかったのか、二度と被害を起こさないために何が必要なのかを検証したものである。その後も取材は継続しており、今後もニュースとして取り上げていく。

また、ジャニーズ事務所に所属するタレントの起用については、今後、事

務所の人権を尊重する姿勢なども考慮して、出演者の起用を検討したい。事務所に対しては、今後の被害者救済や再発防止の取り組みについてＮＨＫとして改めて詳しく説明を求め、その後も実施状況を注意深く確認していく。

ＮＨＫ大阪放送局
番組審議会事務局

２０２３年７月ＮＨＫ近畿地方放送番組審議会

７月のＮＨＫ近畿地方放送番組審議会は、１９日(水)、ＮＨＫ大阪放送局（ウェブ・対面開催）において、９人の委員が出席して開かれた。
会議では､｢２０２３年度後半期の国内放送番組の編成｣について説明があった｡続いて、事前に視聴してもらった､「激突！合戦将棋～賤ケ岳の戦い～」を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、８月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長　笹岡　隆甫（華道　未生流笹岡　三代家元）
副委員長　徳永　恭子（(株)神戸新聞社　経営企画局長 兼 資産活用室長）
委　　員　安達　えみ（合同会社　榧　代表）
井上　信太郎（(株)善兵衛　代表取締役）
太田　達（立命館大学特別招聘教授・工学博士）
佐藤　祐子（(株）国華荘　びわ湖花街道　代表取締役社長）
藤本　真一（ＮＰＯ法人阪神淡路大震災１．１７希望の灯り　代表理事）
前川　卓也（大阪大学大学院　情報科学研究科　准教授）
山本　篤　（プロ陸上競技選手）

（主な発言）

＜「激突！合戦将棋～賤ケ岳の戦い～」
（６月１５日（木）総合 後８：１５～８：４２（近畿ブロック）について＞

○　ＮＨＫには数多くの歴史番組があり、ＣＧを使って合戦の布陣を説明しているシーンはよく見かけるが、それを将棋に置き換えることでこんなにも分かりやすくなるということに驚いた。柴田勝家と羽柴秀吉という２人の大将がどのように策をめぐらせていたのかが伝わってきてとても面白かった。私自身が三河弁や尾張弁の影響を受けた地域で育ったが、秀吉の少し誇張された方言も面白く、好感を持って聞くことができた。また、美術セットや将棋の駒を打つパチンという音など、細部にわたって精緻に作り込まれていると感じた。
○　徳川家康が解説者として戦況についてコメントするなど、凝った演出に終始興

味をひかれた。将棋盤の上で戦況をふかんして見ることができたため歴史に詳しくなくても１回見れば理解することができた。それぞれの武将の人間性も出ていて、その性格が戦況に大きく影響したことも伝わってきた。もし次回があるとするなら歴史上実現しなかった武将同士の合戦のような想像合戦将棋を制作すると、戦国時代が好きな歴史ファンに喜ばれるのではないかと思う。

○　戦国武将の役柄と俳優がマッチしておりキャスティングの妙が面白かった。滋賀県は姉川など、この国を作ってきた合戦の舞台でもあるし、さまざまな街道が集まる地域でもある。番組の中では、対局中に秀吉がバウムクーヘンを食べるシーンがあったが、滋賀県の街道沿いには多様な食文化も根付いている。ぜひそのような内容も盛り込みながら滋賀県に特化してシリーズ化してほしい。

○　戦国時代の合戦を将棋に重ね合わせてストーリー化するというのは過去になかった手法で、今後このようなゲームソフトが出てきそうなぐらい面白いと感じたので、ぜひシリーズ化したらよいと思う。秀吉が対局中に食べていたバウムクーヘンは滋賀県の名物の一つであり大津放送局らしい見せ方だと思った。ぜひ、他にもさまざまなお菓子を登場させてもらいたいと感じた。勝敗が決した後に秀吉と勝家が言葉を交わすシーンは、天下太平を夢見た秀吉の思いが集約されていると感じた。

　ただ、「合戦将棋」というタイトルはシンプルで分かりやすい一方で、歴史にあまり興味のない女性などには敬遠されてしまう可能性があるのではないかと感じた。

○　新しいジャンルを確立する斬新なアイデアだと感心した。差し手の思惑を解説役の徳川家康が推測するという展開も対局を盛り上げるよい演出だった。７月１３日に放送された、えぇトコ「歴史の町に いのち吹き込む～滋賀 長浜市～」がちょうど賤ケ岳の近辺だったので、秀吉の残した史跡を紹介するなど、「激突！合戦将棋」と連動した情報があれば面白かったと思う。

○　将棋と歴史上の合戦の組み合わせはものすごく良いアイデアで、それほど歴史に詳しくなくとも楽しく見られる内容だった。俳優の演技が巧妙で実際の合戦において武将たちがどのように攻めていったのかが伝わってきて、わくわくドキドキしながら見られる番組だった。

○　　藤井聡太さんの影響で世の中に将棋ブームが起きている好機を捉えた番組だと感じた。今のブームは“見る将”という、自分では将棋を指ささずに観戦を楽しむファンが増えているのが特徴で、徳川家康の大盤解説や寝返りを成り駒で表すなど、ファンの心理をうまく捉えた演出が盛り込まれており面白かった。将棋は時間との戦いという側面もあるので、合戦が始まってからの経過時間が分かる仕組みがあれば、持久戦だったのか、短期決戦だったのかということが分かりより面白くなると感じた。

○　合戦を将棋に見立てる思考と着眼点が秀逸だと思った。俳優の演技、特に秀吉の方言には味があり、家康の大盤解説などの演出もユーモアがあり楽しく視聴できた。子どもが歴史を好きになるきっかけにもなると思うので、Ｅテレで放送してもよいのではないか。滋賀県に限らずぜひシリーズ化してほしい。

（ＮＨＫ側）

番組の題字を地元の高校生に書いてもらったり、３０秒の番組ＰＲスポットのナレーションをＮＨＫ杯全国高校放送コンテスト滋賀県大会の朗読部門で優勝した高校生に読んでもらったりするなど、大津放送局と地域が一緒になって作り上げたと感じている。もともとは滋賀県内向けに放送したものだが、近畿ブロックでの放送を経て、８月３日には全国放送も予定しており、今後はシリーズ化、全国展開を視野に入れている。今日いただいたご意見を参考に、よりよい番組にしていきたい。

（ＮＨＫ側）

滋賀県は京都や奈良にも劣らないぐらい歴史の表舞台となってきた土地であることを若い人たちにも気づいてほしいという思いで制作した。将棋という演出をとることで、歴史に興味がない視聴者にも、現在進行形のスポーツ中継を見るような気持ちで見てもらえるのではないかと考えた。秀吉がバウムクーヘンを食べるシーンは、まさに将棋の“おやつタイム”のエッセンスを取り入れるための演出であり、ご当地の名物の中から探したところ、相手の様子をうかがうスコープの役割も果たせるのでバウムクーヘンを採用した。合戦将棋というタイトルも含めて視聴者を限定してしまうというご意見もいただいたので、その点については、演出の中でよ

り多くの人に見てもらえるよう工夫していきたい。今後は他の合戦も取り上げて、郷土や地域に関心を持つきっかけになるような番組を作っていきたい。

＜放送番組一般について＞

○　最近何度か「ウイークエンド関西」を見た。琵琶湖周辺などの情報が紹介されていて、週末のお出かけに便利だと感じた。よく知っている場所であっても、一つ知らなかった情報が加えられるとよいと感じられる。出演者のかけあいも自然な感じでちょうどよく、週末に小さな楽しみを提供してくれる番組だと思う。

（ＮＨＫ側）

土曜朝の３０分番組ということで、平日朝のニュース番組とは違い、より分かりやすく親しみやすく、ゆったり見てもらえるようなコンセプトで続けている。関西の今日が分かるようなニュースを伝えつつ、地域のこともよく分かるような切り口で旅やお得な情報を伝え、マンネリ化しないように発展させていきたい。

○　「笑わない数学」という番組にお笑いトリオ、パンサーの尾形さんが出演していて、中学生と小学校高学年の子どもたちは毎回録画して視聴するほど気に入っていた。子どもたちの心を捉える絶妙なキャスティングなのだろうと感心している。

（ＮＨＫ側）

この番組を制作しているのは、大学院まで数学を勉強していた理系のプロデューサーで、事前に尾形さんと徹底的に打ち合わせを行ったうえで収録に臨んでいる。この秋からのレギュラー放送に向けて現在まさに制作中である。

○　７月１２日（水）に放送された、歴史探偵「南北朝の若君たち 北条時行と北畠顕家」では、珍しく南北朝時代が取り上げられており好感を持った。大河や多くの歴史番組で扱われることはあまりないが、この時代は近畿地方においてはとても重要である。「激突！合戦将棋」のように、この時代のことがよく分かる教育番組の制作を期待している。

また、「えぇトコ」という番組が大好きで、よく見ている。番組の構成が見事で、テンポよく場面が切り替わっていく演出がとても見やすいと感じる。

○　７月１３日（木）に放送された、「物語を、奈良から。興福寺国宝誕生と復興の物語“つなぐ！天平の心”」（総合 午後 7:30～7:55 奈良県域）をＮＨＫプラスで視聴した。非の打ち所がないぐらい美しい映像の番組だったが、タイトルと番組紹介文が気になった。ＮＨＫプラスの内容紹介の末尾には、一文一文すべてに感嘆符「！」がついており、雑な印象を受けた。番組内容がよかっただけに、紹介の仕方が残念だった。

○　７月１４日（金）に放送されたかんさい熱視線「銃撃事件１年 暴力の連鎖を生まないために」を見た。事件から１年経ち、時間とともに世間の関心も薄れていくので定期的に取り上げることは大切だと感じた。ただし内容は、類似の事件を起こさないためには、今回の事件の被告のように孤立した人を出さないことが大切であり、個人の心の持ち方をどうするかというものであり、いまひとつふに落ちなかった。観点自体は非常に面白いので、もう少し工夫があればよいと感じた。

○　７月１４日（金）に放送されたかんさい熱視線は、７月９日に放送されたＮＨＫスペシャル「安倍元首相銃撃から１年 事件の深層と波紋」と連動した番組だと聞いたが、この番組単体で見たときに伝えたいことの真意が分からず、作家と歴史家と社会学者が推察の上に推察を重ねて話をしているだけの印象を持った。ＮＨＫとしては複数の番組を連動させて、その総体で情報を伝えているのかもしれないが、視聴者はすべてを視聴するわけではないので、一つ一つの番組で納得できるように制作してほしい。また、被告本人が動機について詳しく供述していない状況で、被告が事件を起こした背景にさまざまな事情があるという伝え方をすると、テロリストを擁護するような印象を与えかねないと感じた。

（ＮＨＫ側）

安倍元首相銃撃事件については、テロや暴力で現状を変更することは決して許されないという前提に立ち、その上で事件が社会にどのような影響を与えたのかを考えるために番組を制作した。実際に番組を見た人に、テロリストを擁護しているように受け止められたとしたら、制作者の意図がきちんと伝わっていないということになるので、このような意見があったと

いうことは制作現場に伝えたい。また、「ＮＨＫスペシャル」「クローズアップ現代」「かんさい熱視線」などさまざまな番組でこのテーマを扱っているが、いずれも単体で見ても内容を理解してもらえる番組を目指して制作しているもので、この指摘についても制作現場に伝える。

○　７月１６日(日)に放送された「水の守人 京都 鴨川の源流 めぐる生命の物語」（総合 午後 2:00～2:59 近畿ブロック）を見た。映画のようにきれいな映像の隅に「熱中症警戒アラート」という二次元コードが出ていて、それが目についてとてももったいないと感じた。

（ＮＨＫ側）

熱中症警戒アラートは令和３年度から運用が開始され、３年目を迎えている。警報ではないので速報しないといけないというものではないが、毎年たくさんの人が熱中症で亡くなる状況が続いているため、アラートが発出されれば報道機関として伝えるのは使命だと考えている。最初のころはＬ字の字幕で伝えていた時期もあったが、毎日のように発出されるため視聴者から不評で、最近は画面の端に縦に配置して二次元コードを表示する形をとっている。必要な情報を伝えつつ、番組の内容にも集中してもらえるような演出を考えていきたい。

○　７月１８日（火）に放送されたスポーツ×ヒューマン「１７歳“俺はヒーローになる”～車いすテニス・小田凱人～」を見た。最年少で四大大会優勝を遂げるまでのストーリーだったが、彼がいかに苦労してきたかという内容で人々の涙を誘うのではなく、淡々と１７歳の若さと生きる力を見せつけるような番組だったのがとてもよかった。さまざまな悩みを抱える若い人たちの心にも響くような、ＮＨＫらしい番組だと感心した。

○　７月１６日（日）にＥテレで再放送された、日曜美術館「だるまさんの魔法 絵本作家かがくいひろし」を見た。わが家にもこの「だるまさん」シリーズの絵本があるが、娘たちに読み聞かせをすると明らかに反応がよい絵本である。その作者のかがくいひろしさんが、５４歳のときにガンで亡くなっていたこと、亡くなる２年前に出版したのがこのシリーズだったことなど、今回初めて知る内容がたくさんあった。本当は世に出す予定だった絵本の内容やイラストなどが番組内で

紹介されたことには価値があると思った。

○　Ｅテレで放送されている「マイプとティラノの恐竜ダイすき」（Ｅテレ 月～金 午前 8:55～9:00 ほか 近畿ブロック）という５分間の番組を見た。大阪で「恐竜博 2023」が開催されることにあわせて放送されたもので、番組自体は分かりやすかったが、ＮＨＫの番組ホームページを見ると、掲載されている情報がすでに終了した東京での「恐竜博 2023」のものだった。せっかくＮＨＫ大阪放送局として大阪での開催に合わせて放送するのであれば、ホームページの情報も関西版に変えて最新の状態にしておかなければいけないと思う。恐竜博にあわせてＥテレで番組を放送することについては、親子で足を運ぶきっかけになるのでとてもよいと感じた。

（ＮＨＫ側）

ご指摘の通り「恐竜博 2023」の開催に合わせて編成した番組である。視聴者の方に、番組だけでなくホームページに載っている周辺情報まで含めて満足感を得てもらえるように、今後は気を付けて対応していきたい。

ＮＨＫ大阪放送局
番組審議会事務局

２０２３年６月ＮＨＫ近畿地方放送番組審議会

６月のＮＨＫ近畿地方放送番組審議会は、２１日(水)、ＮＨＫ大阪放送局（ウェブ・対面開催）において、１１人の委員が出席して開かれた。

会議では、事前に視聴してもらった、「ほっと関西」を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、７月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長　笹岡　隆甫（華道　未生流笹岡　三代家元）
副委員長　黒木　麻実（公益社団法人　全国消費生活相談員協会　常務理事）
委　　員　安達　えみ（合同会社　榧　代表）
生駒　恭子（(株)プロアシスト　代表取締役社長）
井上　信太郎（(株)善兵衛　代表取締役）
太田　達（立命館大学特別招聘教授・工学博士）
佐藤　祐子（(株）国華荘　びわ湖花街道　代表取締役社長）
徳永　恭子（(株)神戸新聞社　経営企画局長 兼 資産活用室長）
藤本　真一（ＮＰＯ法人阪神淡路大震災１．１７希望の灯り　代表理事）
前川　卓也（大阪大学大学院　情報科学研究科　准教授）
山本　篤　（プロ陸上競技選手）

（主な発言）

＜「ほっと関西」
（５月１０日（水）総合 後６：００～６：５９ 近畿ブロック）について＞

○　スタジオセットや番組ロゴがカラフルなパステル調で構成されており、ニュース番組にもかかわらず穏やかな気持ちで視聴することができた。「ほっと関西」のロゴが、近畿地方の２府４県を表すデザインだと気付き感心した。赤信号でも左折できる“左折可”という道路標識を取り上げた「ｎａｎでｎａｎ？」というリポートは、奈良県民にとっては身近な話題であり、記者の言葉に共感しながら見ることができた。一方で、インターネットのニュース動画再生ランキングを紹介するコーナーにデジタル担当の記者が出演していたが、アナウンサーで紹介でき

る内容を、記者が出演して説明する必然性があるのか疑問に感じた。また、出てくる映像によって記者がマスクを着けていたり着けていなかったりすることも気になった。

○　この番組は学びが多く、気になったことをメモしながら視聴している。奈良県に“左折可”の道路標識が多いというリポートを見ていると、大阪の事情も調べてみたくなった。特定の地域について点の情報を伝えるだけでなく、地域をひろげて線の情報、そして、関西全体という面の情報を伝えてほしい。また、関西の食文化について、“粉もん”が独り歩きしている中で、ハンバーガーという新しい分野の食について紹介されていたことはありがたかった。自分で選んだ具材を調理してオリジナルバーガーを作るお店が取り上げられていたが、このような体験型の取り組みについては、2025 年の大阪・関西万博を控える中で、海外の人にも伝えていってほしい。万博についてはチケットの値段が決まったというニュースも取り上げられていたが、さまざまな方が行ってみたいと思ってもらえるような番組を期待している。

○　小さな子どもがいる世帯にとっては普段「おかあさんといっしょ」などＥテレの番組を見ている時間帯である。メインの視聴者層である高齢者に向けた配慮なのかもしれないが、画面上に文字が多くて映像が見づらいと感じた。また、画面左部分に、特集リポートを放送する時間帯を案内するテロップがＮＨＫプラスを案内する２次元コードとともに出続けていたが、時間が長いと感じた。この番組は４０～５０代の女性をターゲットに据えたいとのことだったが、視聴者を増やすためには、週替わりのＭＣやゲストに朝ドラ出演者を起用するなどの方法がよいと思う。

○　４０～５０代女性という層は、とても多様性のある世代であると思う。実際に番組を見て、どのような点においてターゲットを意識しているのかがいまひとつ分からなかった。例えば、ハンバーガー店を紹介する企画があったが、この年代の女性たちはパンやクッキーなどへの関心の方が高いのではないか。マーケティングリサーチがどれぐらいできているのか疑問に感じた。また、番組途中にスポーツコーナーがあることで流れが分断される印象を受けた。スポーツのようにネットでも簡単に情報が得られるものに時間を割くよりも、もっと関西に特化した内容を全面に出す方がよいと感じた。ターゲットに据えたい世代に好まれる

ような音楽をうまく活用して流すことも効果的だと感じる。

○　番組全体としてバランスがよく、炊事をしながら視聴する分にも飽きさせない内容であったが、４０～５０代の女性がいちばん忙しい時間帯に、その世代をターゲットにした番組を放送すること自体が難しいのではないかと感じた。夕方、仕事や育児で疲れている時間帯なので、他の媒体でも簡単に情報が得られる時事ニュースよりも、番組タイトルのとおり“ほっと”するような、地域の人々の明るい話題や、自己啓発や癒やしにつながる内容があれば視聴してもらいやすいと思う。お天気コーナーは、番組の中盤と終盤に２回放送していたが、内容を変えるなど工夫の余地があると思う。また女性としては洗濯や紫外線に関する情報も知りたいと思った。

○　関西のニュースとバラエティ的な要素がバランスよく紹介されていて非常に見やすかった。奈良県の“左折可”標識のリポートは、記者が自身の素朴な疑問を掘り下げるという、個性の出る企画でおもしろかった。自分は４０～５０代の女性というまさにターゲット層であるが、番組制作者側は、この番組のどういう点が楽しんでもらえると考えているのか、どういうマーケティングや議論をして、何を見せる番組を作ろうとしているのかについて聞きたい。

○　視聴率においてなかなか結果が出ないというのがよく分かる番組だと感じた。特に悪いところがあるわけではないが、ニュース報道を中心に据えているという点が視聴してもらいにくさにつながっていると思う。ニュースはスマホで即座に入手できる時代に、一日のニュースをまとめて振り返る時間を持つことに意義を見出さない人もいる。同時間帯の民放の番組は、ニュースの数を減らし出演者による会話を中心にした番組作りをしつつも、時には重たいテーマを扱うなどして、めりはりをつけている。番組作りにおいてニュース報道をどのように位置づけていくかという点で苦心しているのではないかと感じた。

○　ニュースとリポートが交互に放送されて見やすい構成だった。奈良県に“左折可”標識が多いというリポートは、奈良に数年住んでいたため身近な話題でおもしろかった。番組全体を通してＮＨＫニュース・防災アプリに誘導する場面が何度かあったが、アプリから収益が得られるような仕組みがあるのか気になった。視聴者参加型のクイズコーナーがあったが、２次元コードを読ませてスマホから

投票させるのであれば、投票後にアプリのダウンロードページに遷移させる仕組みを作れば効果的ではないかと感じた。

○　「ＮＨＫ　ＮＥＷＳ　ＷＥＢ」上の関西ニュース動画再生ランキングを紹介するコーナーの直後に、ＮＨＫニュース・防災アプリの紹介が入ってきたので唐突な感じがした。アプリの紹介に転換する場面で、もう少しきちんと説明があった方がよいと感じた。

○　メインキャスターの２人が親しみやすく、「ほっとする」という意味で番組に合っていると思う。時事的なニュースも必要だと思うが、もう少しニュースの割合を減らしてもよいのではないかと感じた。「ｎａｎでｎａｎ？」のように豆知識的なコーナーや、他の曜日には「しあわせニュース」という身近にある小さな幸せを取りあげるコーナーもあり、曜日によって構成を変えているのがよいと思う。５時台からずっとニュース情報番組を放送している中で、番組ごとの差別化やめりはりのつけ方をどのように工夫しているのかが気になった。この番組に限らず、詳細な情報については２次元コードで表示されるホームページやアプリで見てほしいというコメントをよく見かけるが、まさにそこが知りたいという内容も多く、忙しい時間帯にコードを読み込んでいる余裕はないため、きちんと番組の中で紹介する努力をしてほしい。

○　現在のメインの視聴者層である６０代以上への配慮が行き届いた、万人受けするよい番組だと思った。キャスター陣も初々しく、親しみやすい印象を受けた。何を伝えるかも大事だが、誰が伝えるかも大事で、暗いニュースが比較的多い中でも、人間味のあるキャスターが伝えており非常によいと感じた。クイズに対しては賛否両論あるが、一般的には盛り上がる演出で問題がないように思う。ＮＨＫニュース・防災アプリへの誘導については、少し過剰な印象を受けた。

（ＮＨＫ側）

夕方６時台は、ＮＨＫの各放送局が地域ごとにニュース番組を放送している。地域情報の発信強化のため、2022 年度より１０分拡大し６時から放送している。

ニュースの分量が多いと見てもらいにくいという意見をいただいた。ニュース・情報番組として、その日に起きたニュースを伝えていかなけれ

ばならない中で、少しでも見てもらいやすい番組にするため、例えば経済ニュースでは数字を伝えるだけでなく、生活者の視点に落とし込むような解説を加えることで、難しいニュースでも分かりやすく、生活感のあるニュースとして伝えるよう心がけている。

在阪民放では同じキャスターが長年番組を担当することで、放送局とキャスターの顔が一致しているという強みがあるため、今年度から「ほっと関西」でもトークを増やして、アナウンサーの個性や親しみやすさも出していくような演出を試行している。

「ｎａｎでｎａｎ？」や「しあわせニュース」というコーナーは、普段、警察などで難しい取材をしている記者が、視聴者にとって身近な疑問や話題に向き合ったり、行政取材では浮かび上がってこない地域の情報を掘り下げたりして届けるコーナーである。

“顔の見えるニュース”を目指しており、アナウンサーだけでなく、取材した記者やカメラマンなど、その分野のスペシャリストが自らの言葉で伝えることで、より親しみを持ってもらえるのではないかと意図して出演している。アナウンサーに比べると話し方が拙いなどの点については、スキルアップを目指していきたい。

ニュース・防災アプリへの誘導が過剰ではないかという意見を多くいただいたが、これによって収益につながるような仕組みは一切ない。我々としては、取材したニュースをテレビ、ラジオ、ネットなどさまざまな伝送路を使って視聴者に届け切りたいという気持ちがあり、ニュース・防災アプリはそのツールのひとつとして活用している。

議論を重ねながら、見てもらいやすい番組作りを目指している。まだまだ結果につながっていない部分はあるが、引き続き模索していきたい。

（ＮＨＫ側）

新型コロナウイルス感染症が５類に移行した後は、原則、中継やリポートではマスクを着用しない方針である。しかし、基礎疾患などのため重症化リスクがある人に近接して取材を行う場合には着用することにしているため、取材先によってマスクを着用していたりしていなかったりするのが現状である。

（ＮＨＫ側）

決して４０代～５０代の女性だけをターゲットに絞っているというわけではないが、メインの視聴者層が高齢者に偏っており、この時間帯に在宅率の高い主婦層にあまり見てもらっていない現状を改善し、より多くの人に見てもらうことを目指している。

マーケティングについてさまざまな意見をいただき、参考になることが多かった。ＮＨＫでは具体的な店名を出せないどの制約があるため、踏み込みにくい領域はあるものの、まだまだ視聴者の意向を十分に調査しきれていないと感じた。今日いただいた意見を参考に、今後も視聴者意向の把握に努め、質の高いよい番組作りに努めていきたい。

＜放送番組一般について＞

○　日々のニュースを見ていると、例えば、神戸ビーフや京都の伝統産業の現状など、関西の地場産業についての個別具体的な話題はきめ細かに伝えられている印象を持つが、関西の行政や経済がどのような流れの中にあり、それが首都圏や中部圏などと比べてどのような位置付けにあるのかが分かる情報は少ない。地方紙をはじめ関西圏において“関西”というくくりで情報発信をするメディアはあまりない。近畿地方のＮＨＫはそれぞれの府県に放送局を持ちながら、大阪局が拠点局として域内を統括しているので、もう少し“関西”という大局的な視点に立つ番組やコーナーがあるとよいと感じる。

○　朝の連続テレビ小説「らんまん」から「あさイチ」の流れが好きでセットで見ている。「あさイチ」の出演者の対話を聞いていると、自分もその場で一緒に話をしているような気持ちになるので、“朝ドラ”の続きが気になる心境が穏やかになり、よい編成だと感じる。視聴者はそれぞれ固有の視聴習慣を持っており、この番組とこの番組のセットが好きというような人も多いと思うので、そういう調査の結果があれば知りたいと感じる。

（ＮＨＫ側）

過去に大阪放送局で実施した「あさイチ」の視聴者を集めたファンミーティングでも、“朝ドラ”と「あさイチ」をセットで楽しみにしているという声をたくさんいただいた。大阪局の連続テレビ小説の制作チームでも、

どのような形で「あさイチ」につなげていけるかを考えて取り組んでいきたい。

○　６月１日から４日まで放送された「陸上 2023　第 107 回 日本陸上選手権」を見た。直前に放送されていた「ゴルフ 2023 日本ゴルフツアー選手権 2023“最終日”」が延伸となりマルチ編成となったが、切り替えのタイミングが素晴らしかった。当審議会で以前指摘していたサブチャンネルへの案内が分かりづらい点が大きく改善しており評価したい。

○　６月８日（木）と１５日（木）に放送された「シリーズ　御堂筋線モダン建築でたどる大阪１００年」(総合 午後 7:30～8:15 近畿ブロック)を見た。ナビゲーターの片岡愛之助さんが関西弁で案内しており親しみやすかった。毎週のように御堂筋線を利用しているものの、地下鉄に乗ってしまうと地上の様子が分からないが、御堂筋沿いに残存する歴史的建造物が年代を追って丁寧に紹介されており、見ごたえのある番組だった。

○　６月１２日（月）放送の映像の世紀バタフライエフェクト「ビートルズの革命 赤の時代 “のっぽのサリー”が起こした奇跡」を見た。ビートルズが階級社会や人種差別などの問題に強く反対して行動していたという、これまで全く知らなかった一面を知ることができ学びが多かった。ＮＨＫは世界各国から集めたアーカイブ映像を編集した見ごたえのある番組が多くておもしろい。

○　６月１５日（木）放送の「激突！合戦将棋 ～賤ヶ岳の戦い～」(総合 午後 8:15～8:42 近畿ブロック)を見た。俳優が戦国武将にふんして、将棋の駒を打つように歴史上の合戦を繰り広げるという内容だったが、歴史に興味がない人間が見ても納得がいき、非常におもしろかった。これだけ世の中にコンテンツがあふれる中でも、角度や表現を変えるとこんなにおもしろい番組がまだまだできるのだと感心した。

○　６月２０日（火）放送のいいいじゅー！！選「滋賀・長浜市」を見た。この番組は大好きでよく見ているが、今回は、結婚によりこの土地に移り住んだ女性たちの目線で地方に生きる女性の生きづらさや土地の文化の継承などが紹介されていた。地方創生を担うすばらしい番組だと思う。

○　Ｅテレで放送している「ビットワールド」という番組の中に「100 秒でわかる名作劇場」というコーナーがある。世界の名作を 100 秒で紹介するショートアニメで、ナレーションや効果音など動画投稿サイトを意識した作りになっている。100 秒だと展開が早すぎて理解しにくく、自分自身はこのコーナーに疑問を持っているのだが、３歳の娘はとても気に入って見ており、そのことが非常に興味深い。斬新な手法のコーナーだが、どういうねらいで作っているのかについて知りたい。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫでは通常、台本１ページ 300 文字を１分のスピードで読むということにしているが、それだと時間が長くなり、子どもに集中して見てもらうのが難しい。逆に、100 秒集中して見てもらえればすべて分かるように作ってみようということで、あのようなショートアニメの形で制作している。

○　ＮＨＫニュース・防災アプリは雨雲レーダーが搭載されていてよく利用しているが、潮位や風の情報についても提供があるとうれしい。先日、線状降水帯による大雨で避難を考える際、潮位は重要な情報であったので、ぜひ提供してほしい。

○　ＮＨＫニュース・防災アプリは、ＮＨＫの業務の中でどのような位置付けなのか教えてほしい。また、民間企業では災害関連のサービスは業績に左右され安定した事業継続が難しいという実情があるが、ＮＨＫにおいてＢＣＰや災害報道はどういう位置づけなのか知りたい。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫ経営計画の中に５つの重点項目があり、その１項目目に「安心・安全を支える」と掲げている。その中で、放送だけでなくインターネットも活用して「命と暮らしを守る」報道を強化することや、東京の放送センターの代替として大阪放送局のバックアップ機能を強化することについて記載している。また、国の災害対策基本法に基づいてＮＨＫが定めている日本放送協会防災業務計画を遂行するため毎年、非常災害対策等業務実施方針を策定しており、この中でも、情報をあまねく伝えるために放送とデジタルの効果的な連動を図るとしている。災害時にテレビ、ラジオ、デジタルのうち何かひとつでもつながっているという状況を生み出すべく、現在力を入れて

いるツールのひとつがＮＨＫニュース・防災アプリである。

ＮＨＫ大阪放送局
番組審議会事務局

２０２３年５月ＮＨＫ近畿地方放送番組審議会

５月のＮＨＫ近畿地方放送番組審議会は、１７日(水)、ＮＨＫ大阪放送局（ウェブ・対面開催）において、８人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、「２０２２年度近畿地方放送番組の種別ごとの放送時間」について、報告があった。

続いて事前に視聴してもらった、「ニュース　きん５時」を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、６月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長　　笹岡　隆甫（華道　未生流笹岡　三代家元）
副委員長　　黒木　麻実（公益社団法人　全国消費生活相談員協会　常務理事）
委　　員　　安達　えみ（合同会社　榧　代表）
井上信太郎（(株)善兵衛　代表取締役）
徳永　恭子（(株)神戸新聞社　経営企画局長 兼 資産活用室長）
藤本　真一（ＮＰＯ法人阪神淡路大震災１．１７希望の灯り　代表理事）
前川　卓也（大阪大学大学院　情報科学研究科　准教授）
山本　篤　（プロ陸上競技選手）

（主な発言）

＜「ニュース　きん５時」
（４月２８日（金）総合 後５：００～５：５７ 全国）について＞

○　以前から見ているが好感度の高い番組である。ゲスト出演者のコメントが端的で的を射ており、進行がスムーズで気持ちよかった。大阪府枚方市の教育現場の取り組みを紹介する企画では、ＶＴＲで現場の教員の声を伝えた後に、スタジオで教育委員会の担当者から直接話を聞く時間を設けており、様々な立場の考えを知ることができて勉強になった。

○　普段は仕事で見られない時間帯ではあるが、視聴してみると、関西らしい情報発信ができているよい番組だと感じた。大型連休に向けての情報から、教育や農

業というさまざまな課題までバランスよくまとめられており、ニュースを単調に伝えるだけでなく、重要なテーマはリポートとして掘り下げ、スタジオに専門家を迎えて対話形式で伝える形も興味を引いた。今回は大阪府・枚方市の小学校や、大阪大学など、関西の教育現場の具体的な事例が取り上げてられていたが、地方の取り組みを紹介していくことは重要だと感じるので、これからも丁寧に伝えていってほしい。また、今後は万博に向けての情報も全国に発信し、機運醸成につなげてほしい。

○　新しくキャスターに就任した高瀬アナウンサーは、以前は昼のニュースで見かけることが多くまじめな印象だったが、この番組を見て気さくな人柄が伝わってきた。スープ店を経営しながら農業振興に取り組む女性を紹介するリポートの中で“農家を支援している”という言葉が使われていたが、農業に従事する立場として違和感を覚えた。昨今“農業や農家は弱い立場で助けるべき存在”というような表現をよく目にするが、販売店や飲食店などの事業者も農家により支えられており、その関係性は対等だと思う。やみくもに農家を弱い立場のように表現することは望ましくない。

（ＮＨＫ側）

このリポートは新規就農を目指す若者の支援や農業ベンチャー企業の取り組みを紹介することを主題としていたが、タイトルのつけ方などにより、農家が弱い立場でそれを一方的に支援するというようなステレオタイプの伝わり方になってしまった部分があると感じた。気付きを得られる有意義な指摘をいただきありがたい。

○　高瀬アナウンサーは兵庫県出身ということで親近感を持って楽しく見ることができた。平日の午後５時という時間帯は、仕事をしている人たちはまず見られない。在宅率の高い層に向けた番組作りを意識しているのか気になった。また、午後６時台にローカルニュース、７時台、９時台に全国ニュースが放送される流れの中で、この番組独自のねらいはどこにあるのかについて知りたい。

教員の働き方改革は喫緊の課題である。枚方市での取り組みはとても役に立つ報道であり、他の番組にも展開できるよい内容だと感心した。

○　昨年も同時期にこの番組を視聴したが、その時よりも全体的に洗練されていて、

各コーナーとも見やすくなっていた。いわゆるＮＨＫらしい番組で、可もなく不可もなく見やすい番組だと思った。キャスターが高瀬アナウンサーに変わったことによる影響もあるのではと感じた。

○　それぞれのコーナーの内容が充実しており、平日の夕方という忙しい時間帯でも、次週も楽しみと思える内容だった。教育現場の働き方改革の取り組みは、実際に子育てをしている側からすれば喫緊の課題だと捉えている。番組では、子育て中の教員が５時過ぎに帰宅する様子を見て前向きなコメントがなされていたが、ＶＴＲを見ていると、ほとんどの教員が職員室に残っている現状も伝わってきた。それでも、今回のリポートのように、働き方改革がうまくいっている実例を積極的に報道して、全国の教育現場によい影響を与えてほしい。

　また、ＡＩ自動音声によるニュースのクオリティーがますます高くなっており、言われなければＡＩだとわからないレベルまで来ていると感じた。ＡＩでできることはどんどん行えばよいと思う。

○　冒頭のニュース部分は、“ながら見”に適したテンポだと感じた。その後の教育現場のリポートは腰をすえて見たい内容だが、実際に見てみると、インタビューを交えわかりやすくまとめられていた。

　名画、歴史上の人物にふんしたアート作品で知られる美術家の森村泰昌さんへのインタビュー企画は、４月にリニューアルオープンした大阪大学の中之島センターで行われており、施設の内部も紹介されていたため興味深かった。ただ、森村さんが作品のテーマである緒方洪庵について語っているインタビュー内容の真意が伝わりにくかった。もう少し掘り下げた質問をして内容を補ってほしかった。

（ＮＨＫ側）

　新しいキャスターの人柄紹介にもつながるのではないかという趣旨で、スタジオの外でのインタビューを企画した。もう少し深く言葉を引き出してもらいたかったという意見は、制作現場にきちんとフィードバックし、今後の番組作りに生かしていきたい。

○　キャスターが両膝の間に手を挟むしぐさが何度か見られたのが気になった。テーブルがなかったからか、手の置き場所に困っている様子が伝わってきた。

（ＮＨＫ側）

マイクや原稿を持っていないときのキャスターの手の位置は、これまでも指摘いただいている。膝の間に手を挟むしぐさは、おそらく緊張などの心の表れかと思う。無意識に出てしまうものであるが、ご覧になっている方々が気になって、情報が伝わらないのは望ましくないことである。指摘いただいた内容はアナウンサーの現場でも情報共有していきたい。

○　ニュースや短い時間のコーナーを組み合わせた構成で、途中からでも視聴しやすく、この時間帯に適した作りだったと思う。ただし、民放でも同じようなニュース・情報番組を放送している中で他局との差別化が難しく、この番組を選んで視聴してもらうためには工夫が必要だと感じた。

○　関西から全国に向けてニュースを発信する番組が週に１回でもあるというのは有意義なことである。枚方市の教育現場のリポートは、冒頭に教員を目指す学生の不安な声を取り上げて、その後に現場の取り組みを掘り下げていく構成がよいと感じた。枚方だけを取り上げるのではなく、同じような取り組みをしている他の地域についても紹介があればなおよかった。

北野天満宮からの青もみじ中継は、せっかく美しい映像なのに中継の時間が短くて少し物足りなさを感じた。もう少しじっくり時間を割いて伝えてほしかった。ＡＩ自動音声によるニュースは、今の技術ならもっと自然に読めるのではないかと感じるが、ＡＩということであえて不自然さを残しているのかについて伺いたい。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫのＡＩ自動音声は、ニュースに関わる用語も正しく表現できるよう自動と手動の学習機能を設けているが、まだすべてを網羅できるレベルまで達していないのが実情である。ただし、開発の成果を少しでも早く視聴者に還元するとともに、実用の中からのフィードバックでさらに高度化できるよう一部で運用を開始している。今後も、アクセントを含めてニュース用語の学習を重ねて、改善と質の向上に努めていく。

（ＮＨＫ側）

４月からキャスターが１名変わり、ロゴなども刷新してより親しみや

すい番組を目指してリニューアルを進めている。この時間帯は、月曜日から木曜日までは、東京から全国版のニュース・情報番組を発信し、金曜日だけは大阪から発信している。

東京中心の情報発信だけではなく、西日本を代表した大阪からの情報発信として、各コーナーなどは西日本中心の取材構成にしている。出演者も関西にゆかりのあるタレントに準レギュラーのような形でコメンテーターとして出演してもらい、親しみやすさやカジュアルさを出すことで、夕方の忙しい時間でも見てもらいやすいような演出を心がけている。

教員の働き方改革の取り組みについては、新学期が始まる時期を捉えて放送した。他の教育委員会でも同様の取り組みが行われていると思うが、教育現場は取材が難しいこともあり、まずは取材の許可が得られた枚方市について取り上げた。この内容は、５月１８日（木）の「みみより！くらし解説」（総合 午前10:45～10:55)の中でも全国に発信する予定である。

（ＮＨＫ側）

番組編成の視点から、夕方の忙しい時間帯にリアルタイムで見るのに適した番組になっているか伺いたいと思っていた。思いのほか肯定的な意見を多数いただいたことは励みになる。今回いただいたさまざまな意見をもとに、内容のブラッシュアップを含め、今後の番組編成につなげていきたい。

＜放送番組一般について＞

○　リニューアルされた「ＮＨＫのど自慢」を数回視聴した。この番組のだいご味であった生バンドの演奏がカラオケになった点について、１回目に見たときはとてももったいなく残念に感じた。しかし、２～３回見ていくうちに、よい意味で印象が変わってきた。若い世代の人たちが、アニメソングなどの新しい歌にチャレンジしているのを見て、カラオケになったことが、出場者の拡大に一役買っているように感じ、「ＮＨＫのど自慢」という老舗コンテンツがいちばん大切にしたいものを守るためのチャレンジだったのではと見方が変わった。ＮＨＫの内部でどのような評価があるのか、また視聴者からどのような反響があるのかについて伺いたい。

（ＮＨＫ側）

リニューアルする前は、本番前日に多いときで 250 組が参加する予選会から全曲生伴奏で対応していた。また、若い世代が希望する楽曲の中には“打ち込み”というコンピュータでしか表現しにくいものも増えてきており、バンドの生演奏で対応するには限界があるという課題も浮上していた。この先も「ＮＨＫのど自慢」という看板番組を守り、時代に合った方法で出演者のパフォーマンスを発揮してもらうための決断だったと聞いている。視聴者からは、「生バンドでなくなってさみしい」というような声と、「この曲を演奏するにはカラオケでやるほか仕方がない」というような両面の声が届いている。

○　４月１９日（水）の歴史探偵「坂本龍馬　本当のスゴさとは！？」を見た。坂本龍馬が歴史の教科書などから消えつつあるということで、龍馬の知られざる一面や貢献を紹介する内容だった。この番組は最新の研究をもとに歴史の授業で教わった知識を覆してくれるのでおもしろいが、過去に映像化された作品などの影響でイメージが偏っている坂本龍馬は最たる好例だと思った。

○　５月１１日（木）の【ＮＨＫ地域局発】かんさい熱視線「もう一度この教室から　再出発・高校生の８か月」を見た。不登校や、対人関係の悩みなど、見た目には分かりにくい困りごとを抱えた 157 人の生徒が、学校生活を通じて社会の中で自立して生きる力を付けていくという内容のドキュメンタリーだったが、まず、公立でこのような高校があることを初めて知った。取材当初には髪の毛で顔を隠し表情が分からなかった生徒が、最後には目元を出して、明るい表情をしていたのが印象的だった。８か月分の取材内容を３０分弱に収めるために割愛された部分がたくさんあると思うので、もう少し長い放送尺でもよかったのではと思う。対人関係が苦手な生徒が、カメラの前で顔も名前も出してインタビューに答えるというのは非常に大変なことだと思うので、そこに行きつくまでの取材に苦労があったのではないかと感じた。

（ＮＨＫ側）

コロナ禍によって誕生したといっても過言ではない番組だ。当時は新型コロナウイルスの影響で、外でのロケができず、番組制作が滞りかねなかった。その際に、アーカイブ映像に対して焦点の当て方を工夫すれば新

たなコンテンツができるのではないかと考えた。数年前から定時化を見据えて制作してきたが、好評を受けて今年度から水曜の夜間の定時番組となったので、ぜひご覧いただきたい。

○　「かんさい熱視線」を見たが、不登校や対人関係という、ともすればカメラの前に出にくいような悩みを抱えた生徒たちが、顔を出してインタビューに応じていたのが印象的で、制作者が熱意を持って粘り強く取材したことが伝わってきた。様々な媒体で瞬時にして情報が伝わる今の時代にＮＨＫに求められているのは、この番組のように“人”にスポットを当てて、活躍する姿や裏側にある苦悩を描き出すようなことではないかと思う。

５月１５日（月）の「ニュースウオッチ９」において、新型コロナワクチン接種後に亡くなった方の遺族を、まるで新型コロナに感染して亡くなった方の遺族のように編集して放送していた。なぜこのようなことが起きたのか。ＮＨＫはよい番組をたくさん放送していると思うが、ひとつこういう不祥事が起こると、批判が巻き起こり台なしになるのでもったいないと思う。

また、最近テレビ画面上にやたらとＱＲコードが出ており、先日大相撲中継を見ていたら同じ画面上に２つも出ていた。デジタル化が進む中で、何が何でもネットというのは違うと思う。

（ＮＨＫ側）

「ニュースウオッチ９」の件については、ご指摘をいただいたとおり、ひとつの不適切なニュースでＮＨＫ全体の信頼性が大きく失われるということを重く受け止め、このような意見があったことは本部にもしっかりと伝えたい。

ＱＲコードは、災害時にテレビ画面ではお伝えしきれない避難情報を、ネットのニュース・防災アプリに誘導して見ていただく目的でスタートしたものである。放送とデジタルをどのようにつないでいくかという今、重要なツールのひとつとして多用しているところがあるかもしれない。視聴者の目線で見たときに、本当に役に立つＱＲコードの使い道について、今後も引き続き検討していきたい。

○　５月１６日（火）の１００カメ「アクションチーム 大河ドラマ“どうする家康”を支える職人集団に密着！」を見た。夕食も終わり、お茶をしながら見るのにちょ

うどよいと感じた。たくさんのカメラで撮影した映像を細かく切り替えストーリーを作る編集は難しいと思うが、よくまとまっていて、飽きずに見ることができた。大河ドラマのアクションシーンは、カメラワークや演出によって迫力が出されているものだと思っていたが、定点カメラで撮影されたこの番組の映像を見て、俳優の動き自体が素晴らしいということが伝わってきた。

（ＮＨＫ側）

技術の進歩により、大量の映像素材の管理や編集ができるようになってきている。100 台のカメラが撮影した数日分の映像を、１か月ほどかけてすべて見た上で編集している。カメラマンを意識しない自然なやりとりが撮影できるということは画期的なことで、今後もこのような新しい発想のコンテンツを開発すべく取り組んでいく。

○　５月１０日（水）の令和ネット論「（６）ＣｈａｔＧＰＴ徹底解説＋活用術」(Ｅテレ 午後 10:00～10:29)を見た。ＣｈａｔＧＰＴがすごく話題になっているので興味を持ったが、とても勉強になる内容だった。ＡＩも、簡単に扱えるものではなく、付き合ううえで人間の国語力が試されるということがよく分かった。

○　５月１１日（木）のえぇとこ「街道のにぎわい いまに伝える～滋賀 草津市～」を見た。放送前にはＳＮＳ上で多くの地元の人たちがこの番組について言及しており、関心の高さがうかがい知れた。日常では素通りしてしまう、商店街のわずかな区間に残っているような歴史が丁寧に伝えられており、あらためて価値のある番組だと思った。最後に映し出された草津川跡地の公園の映像は、人がまばらでさみしい印象を受けたので、多くの住民が集まり賑わいを見せる休日の映像だとなおよかった。

ＮＨＫ大阪放送局
番組審議会事務局

２０２３年４月ＮＨＫ近畿地方放送番組審議会

４月のＮＨＫ近畿地方放送番組審議会は、１９日(水)、ＮＨＫ大阪放送局（ウェブ・対面開催）において、９人の委員が出席して開かれた。

会議ではまず、事前に視聴してもらった、「ロボット新世紀　大阪・関西万博まであと２年　～ＳＦアニメ×関西未来予想～」を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、５月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長　　笹岡　隆甫（華道　未生流笹岡　三代家元）
副委員長　　黒木　麻実（公益社団法人　全国消費生活相談員協会　常務理事）
委　　員　　安達　えみ（合同会社　榧　代表）
井上信太郎（(株)善兵衛　代表取締役）
徳永　恭子（(株)神戸新聞社　経営企画局長 兼 資産活用室長）
藤本　真一（ＮＰＯ法人阪神淡路大震災１．１７希望の灯り　代表理事）
堀江　尚子（認定ＮＰＯ法人　くさつ未来プロジェクト　代表）
前川　卓也（大阪大学大学院　情報科学研究科　准教授）
山本　篤　（プロ陸上競技選手）

（主な発言）

＜「ロボット新世紀　大阪・関西万博まであと２年
～ＳＦアニメ×関西未来予想～」
（３月１９日（日）総合　後６：０５～６：４３　近畿ブロック）について＞

○　日本のアニメーターを代表するような形で大阪・関西万博のプロデューサーの１人である河森正治さんが出演していたことがうれしかった。アニメに関わった人がどのような立ち位置や目線で万博を作り上げていくのかは興味があり、河森さんが万博でどのような活躍をされているのかを特集した番組も見てみたいと感じた。番組全体として、ロボットの開発者の方々のポリシーや開発にかける思い、背景がおもしろく、ゼロからものを生み出す人の考え方を知ることができてよ

かった。最近はＡＩが話題になることが多く、人間の仕事が奪われていくことに漠然とした不安を感じていたが、今回はそういった視点ではなく、人間とロボットとの共存について考えていたのでよかった。番組内で、この番組にとって軸になる印象的なことばが何度か出ていたが、テロップで表示されていなかったので、視覚的に強調されていればなおよかった。

○　終始わくわくする内容で楽しめた。作業機械の感覚を延長させた人型ロボットが活躍するアニメ『パトレイバー』の世界観から着想を得た“人機”というロボットが、実際の電線工事に活用され、人と一緒に作業をするなど、未来がすぐそこにあると感じた。世界に誇れる日本の文化であるアニメや漫画に登場するものを、実現しようとするクリエイティブな思考は日本ならではだと思う。大阪・関西万博まで２年というタイミングだが、こういうテーマの番組を何回か放送していたのか、それともこの番組だけだったのか気になった。

○　ロボットとアニメの組み合わせがおもしろく、映像も目を引きとても楽しく見た。なによりロボット産業については関西の存在感が強いことがうれしかった。関西のものづくりの底力については、連続テレビ小説「舞いあがれ！」でも描かれていたが、引き続き取り上げてほしい。一方、大阪・関西万博に展示される技術が今回の番組のようなものであるとすれば、目新しさは感じないのではないか。1970 年の大阪万博とは違い光り輝く未来というだけでは説得力を持たないのだろうと感じた。今後万博を取り上げる際は、どうすれば皆が興味、関心を持てるのか、万博を通じてなにが人々の暮らしに価値を提案できるのかを考慮して制作することが必要だと思う。

○　番組の尺が少し長く感じ、そのわりに内容が薄く、驚きも少なかった。ロボットや空飛ぶ車など今話題の技術は、昔から言い続けられているもので、未来を感じさせるには古いと感じた。３ＤテレビやＶＲ映像などさまざまな技術が出てきては現実にそぐわず消えていくということが今までもあり、大きな夢を見るには現実の技術がついてきていないと感じてしまった。子ども向けということではよかったのかもしれないが自分には響かなかった。

○　『ヤッターマン』など昔家族で見ていたアニメの映像も使用していたため、最初から心をつかまれた。ゲストの市川紗椰さんの、アニメやロボットが好きな様

子が伝わってきて、彼女のおかげで視聴者の期待や興奮も増したと思う。子どもたちに人気がある作品から着想を得て、人力ではできない作業を行うロボットを開発したという物語性が、子どもたちだけでなく大人にも夢を与えてくれるすばらしい番組だった。自分たちの想像からアクションを起こして現実にしていくプロセスがとても大事だと感じた。

○　開発された“人機”や腹くう鏡手術に用いるロボットなどは以前から知っていたが、全体的に楽しめる内容だった。月面探査のロボットが、回転する車輪の軸をずらしていたり、倒れても起き上がれるように尻尾をつけていたり、シンプルな構造ながらも過酷な環境でも動けるように設計されていることがスタジオでも実際に動かしていたのでわかりやすかった。月面探査のロボットのミッションについて説明が少なく、下水工事などで使われる“群ロボット”と『ヤッターマン』との関連性に説得力がなかったことは残念だった。

○　昔放送していたアニメの世界に登場するロボットを、現実に開発し、歩行式の作業機械などに求められる動きを可能にしており、時代とともに技術が進化していると感じた。ロボットがこの先どうなっていくのかまた番組にしてほしい。最近話題となっている空飛ぶ車についても、今後どのように広まっていくのかが見えてくると、今開発されているテクノロジーがどのように進化、実用化されていくのかが分かってくると思う。アニメからのインスピレーションで制作されていることは楽しく、心をくすぐる番組だった。

○　大阪・関西万博とは直接関係のない内容だったが、子どもたちの興味を引く内容になっていたと思う。子どものころに見ていたアニメに影響を受け大人になってそれを実現していく姿を見て、子どもたちもロボットの開発に興味を持つのではと感じた。開発者の方々は、人がやっていることをすべてロボットが取って代わるのではなく、共存していくことを探っていると感じた。危険な作業を代行するロボットが増えれば人手不足の解消にもつながり、社会問題の解決にもつながると思う。1970 年の大阪万博はパビリオンを２か所くらい見たら１日が終わってしまうくらいの盛況だったが、今回はそれと同じくらいの盛り上がりがあるのかは疑問だ。興味を持っている人が少ないというアンケート結果も出ているが、こういう番組がもっと作られれば興味を持つ人も増えてくると思う。

○　出演者の方々のすばらしいコメントが多くあり印象的だった。一方、大阪・関西万博に向けてという文脈はわかるが、紹介するロボットのレベルが高いせいか、関西の企業や大学だけを取り上げる必然性があまり感じられなかったと思う。

○　ロボットがなんのために必要なのかを理解でき、今後の展開に興味を持った。メディアで取り上げることで、大阪・関西万博に興味がない人や、知らない人の機運醸成につながると思うので、このような番組を引き続き制作してほしい。万博に関連させずとも、ロボットというテーマだけでシリーズ展開できると思うので、その際は今話題を呼んでいるＡＩなども取り上げてほしい。

（ＮＨＫ側）

大阪・関西万博開催まで２年という節目でなにかできないかと検討をしていく中で、今回はロボットをテーマとすることになった。検討を進める中で新しい機能を中心に描くよりも、開発者の方々がロボット開発にあたりアニメから着想を得たということを中心とした方が多くの人に見られるのではないかと考えて演出した。

（ＮＨＫ側）

ロボット新世紀という漠然とした、非常に壮大なテーマをどのように番組にするか検討を重ねた。３８分間の番組だが、スタジオ収録は３倍もの長さになっており、専門家やアニメ、ロボットが好きな方が集まるとこれほどの熱量になるのかと驚いた。その熱量の高さは出演していたみなさまのコメントに表れているとは思うが、これだけの内容をどうやって家族で視聴できる番組にまとめるかということに苦労した。

（ＮＨＫ側）

この番組を放送した１週間後の同じ時間にも大阪・関西万博関連の番組「発見！“なにワザ”」を放送した。開催の２年前となる４月１３日の「列島ニュース」では、鍬入れ式の模様も中継した。今後も引き続き大阪・関西万博関連の番組を編成していきたい。

＜放送番組一般について＞

○　３月３１日（金）の「ＢＵＭＰ　ＯＦ　ＣＨＩＣＫＥＮ１８祭『窓の中から』を１０００人の１８歳世代と共演」（総合 後 10:00～11：15）を見た。楽しみにしている番組で、毎年違うアーティストと１７歳から２０歳までの 1000 人が一緒になってアーティストが制作した曲を歌うという番組だが、今回は個人的にも好きな BUMP　OF　CHICKEN だった。成人年齢が１８歳に引き下げられたことに対して、悩みや不安が赤裸々に語られており、密着した取材はＮＨＫならではだと感じた。

（ＮＨＫ側）

選挙権年齢を引き下げるというタイミングで１８歳に対してどのようなアプローチができるかと考え取り組んできた。毎年若年層と一緒に楽曲を作る中で、大人も励まされる番組となっている。

○　４月１２日（水）の天然素材ＮＨＫ「１オクターブ上の音楽」を見た。事前情報もなく見たが、ＮＨＫの過去の膨大な映像を再編集するとこんなにも本気でふざけた番組が制作できるのかと驚きおもしろかった。ＮＨＫのバラエティー番組は計算された演出で息苦しさを感じていたが、この番組はそれがなく、膨大なアーカイブの中からよくこれだけのものを持ってきたなと感心した。取り上げられていた番組の中には、今の時代でも深夜に放送したら話題になりそうなものもあったので、そういう取り組みもおもしろいと思う。

（ＮＨＫ側）

コロナ禍によって誕生したといっても過言ではない番組だ。当時は新型コロナウイルスの影響で、外でのロケができず、番組制作が滞りかねなかった。その際に、アーカイブ映像に対して焦点の当て方を工夫すれば新たなコンテンツができるのではないかと考えた。数年前から定時化を見据えて制作してきたが、好評を受けて今年度から水曜の夜間の定時番組となったので、ぜひご覧いただきたい。

○　連続テレビ小説「舞いあがれ！」を最後まで楽しく見た。物語序盤や中盤の伏線を見事に回収しておりよかった。

（ＮＨＫ側）

最終回の五島列島のロケは天候にも恵まれ、300 人ものエキストラの

みなさまと無事撮影を終えることができた。

○　４月７日（金）のかんさい熱視線「それでも在日を生きる～朝鮮学校“チェーサー”閉校までの記録～」を見た。朝鮮学校が閉校するまでを追ったドキュメント番組で興味深かった。関西では朝鮮学校の歴史は古いが、世代による考え方の違いが見られ、年配の方がアイデンティティーを継続する居場所としての学校と捉える一方、若い世代の話からは自らのアイデンティティーを追い求め続けるつらさが伝わってくる、リアリティーのある番組だった。どうしても国際政治の中で分断が生まれてしまうことがあるが、こういう日常を追い続けてフラットな形で番組にして伝えていくと、分断が少し薄れる効果があるという気づきを得ることができた番組だった。

○　中部地方出身ということもあり在日韓国・朝鮮人の実情をあまり知らなかったので見てみたが、多様性を受け入れようとするこれからの社会で、国籍やルーツにより分かれて学校に通うのではなく、一緒に育っていくことが大事だと感じた。在日韓国・朝鮮人が多いほかの学校にも出前授業をするなどして、文化の交流を学校で取り組んでいけば、多くの児童がその背景を知ることができると思う。こういう番組があることでそういうことを考えさせられるきっかけになると思う。

（ＮＨＫ側）

朝鮮学校の現状というテーマは「バリバラ」などでも取り上げてきたが、学校が閉校するというタイミングで、どういった方がどういう思いでいるのかを改めて伝えることは意義があると思い制作に至った。

○　４月１２日（水）の歴史探偵「ツタンカーメン　歴史の闇に消えた少年王」を見た。昔学んだ知識では、権力も無く、不遇な王とのことだったが、最新の学説ではバイタリティあふれる性格で自ら戦場で戦う勇ましい王だったいうことで、知識のアップデートができうれしい。

○　４月１４日（金）に大阪府のＩＲ整備計画を国が認定したというニュースを見た。ＩＲについては、取り上げにくいテーマなのかもしれないが、その光と影の両面に迫る特集番組などを制作することを期待している。

○　４月１４日（金）のかんさい熱視線「地方の危機を“攻める”大学が救う！？」を見た。奈良県立医科大学が地元企業と抗ウイルスマスクを共同開発するなど地方大学の取り組みを紹介していた。かつての地方大学生はアルバイトや教育実習以外で地域の人と関わることがなく、うつになったり孤立したりする学生も多かったと感じる。以前のように学生の数が多く、いかに試験で落とすかという考えから、いかに学生に入学してもらうかという考え方に変わってきていると思う。大学の社会実験に市民が参加する機会もあり、この番組の内容が現実と合致していると感じた。地域において、大学と企業が、研究と事業を通して協力することが大事になっていくと感じた。こういう番組を制作してくれることで進路に悩む中学生、高校生にも大学の取り組みを知るよい機会になると思う。地域で困っている人の役に立つことで、社会に出る際の仕事に対する心構え、やりがいにもつながると感じた。

（ＮＨＫ側）

地域の放送局として教育や、地元の産業など若い世代の人に対してどういった形で情報を提供できるか、応援できるかということは大きな課題として考えている。

○　４月１６日（日）のＤｅａｒにっぽん「クジラとイルカの町で～和歌山・太地町の飼育員たち～」を見た。和歌山県太地町にある「くじらの博物館」の飼育員の方々を取材したもので、この町で続いてきたイルカの追い込み漁が残酷だと主に欧米で批判的に見られてしまう中で、若い飼育員たちが漁で捕獲したイルカの飼育という仕事に葛藤しながら向き合っていた。欧米と日本の考え方の溝を埋めるのは難しいとは思うが、考えさせられるよい番組だった。

○　地域放送局の番組内容が地域の人々が本当に求めているものとマッチしていないのではないかと感じている。奈良局山下局長からの報告で奈良局が制作した番組について海外からの反応が多いとあったが、まさしくそのとおりで私自身も居住している地域の番組はあまり見ていない。地域の情報を求めているのは、その地域の外の人だと感じている。

○　　４月１４日（金）の「ニュース６３０　京いちにち」で放送していた、京都市交響楽団の新しい常任指揮者の沖澤のどかさんのインタビューを見たが、非常

に見応えがありよかった。ニュースの視聴形態も変わってきているので、ＷＥＢ展開含めてさまざまな発信を期待している。ＮＨＫプラスもあるが地域の番組は検索しづらく、アクセスについて解決策があるとよいと思う。

ＮＨＫのニュースで最近ＡＩによるアナウンスが多いと感じる。試みとしてはよいことだが、ロボットのような話し方が気になった。現代の技術であればより自然にすることができると思うが、あえて不自然さを残しているのかと疑問に感じた。

ＮＨＫ大阪放送局
番組審議会事務局